

ALUMNI NEWS

INTERNATIONAL
CHRISTIAN UNIVERSITY
ICU ALUMNI
ASSOCIATION
3-10-2, Osawa
Mitaka-shi, Tokyo 181-8585



TEL&FAX : 0422 33 3320
<https://www.icualumni.com/>
E-mail : icualumni.office@icu.ac.jp

ALUMNI NEWS
VOL.143 SEP.2025

特集 人と向き合い、越境をいとわない医療人たち : p.02
DAY賞 受賞者 同窓生へのメッセージ : p.06
Think globally, act locally. 松島保真さん : p.12
A_People 小林晶子さん : p.15
お邪魔します！あのメジャー 政治学 具 裕珍 助教 : p.16
From the University : p.18
From the Alumni House : p.20





上左：加藤さん／上右：三橋さん／下左：古井さん／右中：市野瀬さん／右下：吉川さん

特集

人と向き合い、越境をいとわない医療人たち

身の周りのICU卒業生を見回して、医療関係者が割といらっしゃると思うことはないだろうか？ 今回の特集は、そんな気づきからスタートした。同窓会名簿によると、勤務先情報のある約12000件中約190人（1.5%）が医療関係者で、近年も少なくとも3～4人が卒業後すぐに医療の道に進んでいるという。同窓会には医療関係者の支部があり、約140人の登録者（うちFacebookグループ登録者64人）がいる。早稲田大学にも同様の組織があるが、人数は200人強。卒業生総数の差を考えると、ICU卒業生における医療関係者は多い印象を受ける。ICUは教養学部のみ。医師になるためにはあらためて医学部に行く必要がある。同窓会支部の設立にかかわったカイロプラクターの佃隆さん（44 ID00）は、「さまざまな職種、年代の方がいますが、共通して感じるのは、みなさんミッション意識がとても強い」と指摘する。はたして医師となったICUの卒業生たちは、なぜその道を歩み、何を目標しているのだろうか。そこにICUの環境や経験は影響しているだろうか？ 今回は医師の方にお話を伺った。

文：福本高宏（本誌）・今井 順（本誌） 写真：本人提供

©d-koi-COFXWa6LJdw-unsplash

かかりつけ医として 地域に根を張る国際人 ——加藤徹男さん(34 ID90)

現在茨城県の西南医療センター病院
附属八千代診療所で所長を勤める加藤徹男さんは、毎日60～70人の患者を診る。2016年1月に赴任して以来、ここに来ればひとまず診断がつき、専門医にもつないでくれたり、訪問診療をしてくれたりする、医療資源過少地域の「かかりつけ医」として働いている。診療所のホームページにもその意図は明らかで、難しいことは書かれていない。「内科」ということになっているが「総合診療方式」をとっており、「年齢や健康問題の種類を区別せず対応させていただきます」と、問口の広さが誰にでもわかる。体の調子は悪いが何科に行けばいいのか分からない時でも、「一通りのことはなんでも診る」ことを目指してきた加藤さんは、しっかり向き合ってくれる。

ICU入学当初から医師になることを目指していたわけではない。地元の筑波大学に受かったものの、実家から離れてみたかったからとICUに進学、サイクリング部の活動を楽しみつつ、教育学科で心理学を専攻した。4年次には就職の内定ももらったが、時はバブル絶頂期、少々就職時期が遅れても大丈夫かなと思ったという。たまたま見かけた海外協力隊のパンフレットにあったカリブの海がまぶしくて、応募することにした。

2年半過ごしたドミニカでは公衆衛生の問題に携わった。活動の中心に医師がおり、医療の恩恵にあずかりにくいコミュニティの健康指標がよくなっていく過程に感銘を受けた。帰国後は家族計画国際協力財団(JOICFP；ジョイセフ)でラテンアメリカを中心に各国の提出するプロポーザルの審査など、事務的な仕事をしていた。そんな日々を送るうち、もっと人々の生活に根差した保健医療にも専門的に、中心的に係わりたいという思いが強くなった。

1996年、宮崎医科大学(現宮崎大学医学部)に入学。すでに家庭を持っていたこともあり必死で勉強した。医

学部のカリキュラムはとにかく専門分化していくが、ドミニカの現場で間近に見た医療者の実践を思うと、分化する専門を追うよりも、新しく芽生え始めていた総合診療に惹かれていった。卒業後しばらくは地域に根ざした中小病院でジェネラリストとしての基礎を積んできたが、現勤務先の診療所長の空きができたとき、応募することに迷いはなかったという。家庭医、ジェネラリストを目指してきた加藤さんは、もはや地域になくてはならない存在だ。とある医療人類学のワークショップに参加して話した際、加藤さんの仕事ぶりは「水のような仕事」と評されたという。当たり前のように存在しているが、命にとって一番大事、という含意だろう。海外経験のある加藤さんは、地元で多い外国人技能実習生にも気を配る。海外で体調不良に陥る不安は大きいだろうと、多言語対応など寄り添うことを心がけているという。

再び南米の海が見たくなった加藤さんは、リオデジャネイロで開かれたパラリンピックで、帯同医師の公募に応募し日本チームに同行したという。大事がなくてよかったと笑う加藤さんは海外留学生のホームステイを引き受けるなど、グラスルーツの国際交流にも熱心だ。

つらい人に共感し、 ともに歩みたい ——三橋成輝さん(35 ID91)

三橋成輝さんは、脳神経内科を専門としている。パーキンソン病やALS(筋萎縮性側索硬化症)など、神経系の難病がその対象だ。ただ、三橋さんの職場は最先端の機器が揃う場所ではない。それどころか病院ですらない。三橋さんは、こうした病を患う人々をその自宅で診る、訪問診療を活動の中心に据えている。患者の中には自力で通院できない人もおり、ならばこちらから出かけて行くのが自分の仕事だという覚悟が見える。やはり自宅にいる末期のがん患者なども診るが、病院での診療と違い、時に患者の人生観を聞くことにもなり、やや長めの診療になる。

三橋さんは山形県出身。小さいこ

ろには医師になりたいと思っていたが、それには母親が保健師だったことの影響が少なからずあったという。しかし高校時代は理数系の成績が伸びず、文系に進むことにした。ICUでは教育学科、加藤さんと同じく心理学専攻だった。第二男子寮で過ごし、空手部で活躍した。ちなみに、当時の第二男子寮からは、松山弘紀さん(34 ID90)や、空手部でも先輩だった芹澤昌史さん(32 ID88)も医師になっている。特に芹澤さんと三橋さんは信州大学医学部で同期生。「今後は芹ちゃんと呼んでくれ」と言われ、かえって緊張したという。

ICU卒業後は当時の新日鉄に就職した。国全体を考える良い会社ではあったが、どこか人生に不全感を覚えた。もっと直接人の役に立ちたいと、医師になることを思いたった。心理学をやっていたので精神科も考えたが、ICU時代の恩師(小谷英文先生)のアドバイスもあり、内科を選択。それも、長期間病氣と付き合うことが多く、認知機能が衰えないのに体の自由が奪われる脳神経系の病氣は、患者の心身両面に長期間関わる必要があると思い、専門にしたという。

博士課程を終え、最初は病院勤めをしていたが、その時は難病患者の社会復帰を目指すことで意気投合した仲間たちと、新しい病棟を立ち上げたりしたという。しかし、次第に病院に来られない人を診ること、在宅診療の必要性を強く感じるようになり、今の実践にたどり着いた。患者の苦しみを軽減し前を向いて生きてもらえるよう、また最期の時を迎えることになったとしても、それが納得のゆく、できる限り幸せな形になるよう、患者や家族と一緒に、考えることを心がけている。

こうした実践の中から、漢方を勉強する必要性も感じたという。つらい人、苦しい人、死に向かって歩んでいる人、そういう人たちにできることは何か。訪問において、西洋医学的な診療だけでは打つ手が限られていると感じることもあり、古来からの煎じ薬による漢方治療を実践していた北里大学で研修し、専門医と

なった。「何か患者さんの人生の質を上げる方法はないか」と探した方法を手に、今日も診療を続けている。

患者と医療チームの すべてを俯瞰する目 ——古井(旧姓:星)郁恵さん(44 ID00)

アメリカのリベラルアーツカレッジには、卒業後、プロフェッショナル・スクールとしての医学部を受けるためのプリ・メドと呼ばれるプログラムが設置されていることがある。もちろんICUにはないのだが、ICU在学中にしっかり準備して医学部に進んだ卒業生はいる。

そんな一人が、現在東京女子医科大学の麻酔科に勤める古井郁恵さんだ。古井さんはICU在学中理学科に在籍し、堀内晶子先生の下で「生物学寄りの化学」を勉強した。「楽しい実験生活はほぼ部活だった」。高校時代から医学部に興味はあったが本格的な決意には至らず、教会幼稚園の卒園で馴染みもあったICUが「とってくれた」と感じ、入学。CMSでチェロを弾いたり、友人と離島に出かけたり、のびのび楽しく過ごしたという。将来を考えるにあたって、理学系の大学院進学を考えると同時に、医師だった父親の仕事ぶりに影響を受け、医学部編入も準備した。卒論も重なった4年次はかなり忙しかったが、無事島根医科大学(現島根大学医学部)に入学。ちょっとのんびりしていたら入試前日には島根入りできず、当日の朝飛んで合格したというつわものぶり。ここで「ICU生らしい」と評するのはやめておこう。

医学生生活は当初少々つまらなかった。慣れはしたものの、やっとの思いで卒業した。麻酔科を選んだ理由は、どんな手術にも対応するから。「そのココロは？」とお聞きすると、「患者さんをまるっとみることができること」という。もちろん手術の執刀医も患者のことを勉強しているが、その勉強はまさに治そうとする疾患に集中しがち。本人の病歴など、当該疾患以外の特徴を知っておくことが麻酔科医の仕事で、その全体性が魅力だという。だから、その時その時の必要で指示を出す執刀医に対して、それは危険ではない

かと意見を言う立場になることがあるという。そんな責任感を持ちつつ、手術室にいるチーム全員の動きを頭に入れ、パイロットのように俯瞰する必要があるのもまた面白いのだそう。

古井さんの関心は麻酔科医としての仕事にとどまらない。手術室というのは特殊な環境。患者が普段過ごす日常や生活に寄り添った医療をという思いから、自ら手を挙げてペインクリニックの外来で週2回働き、緩和ケアチームにも週1回顔を出し、栄養サポートチームにも入るという八面六臂の活躍だ。こんな活躍の背後にあるのも、やはり患者さんをまるっと一人の人として見る姿勢だ。この姿勢が、彼女を東洋医学の勉強にも向かわせた。漢方の処方自体は医師に認められているので、産婦人科医には専門医の資格を取る医師が珍しくないという。普段から、他の面から見たらどう見えるのかなと考えたり、患者さんの背景・生活習慣を想像したり、そんなことをしたくなるのはICUの影響かなと思うという古井さん。今後はもっと患者の近くで、東洋医学も生かしつつ在宅診療に軸足を移していけばいいなと語ってくれた。

**教え、教えられる
医療の実践と教育**
——市野瀬剛さん (48 ID04)

市野瀬剛さんはICU在学中は理学科所属、生物学を専攻した。在学中から医学部編入を目指し、実際ICU卒業後、弘前大学医学部に編入した。彼が入学したころ、医学部を目指す友人は何人もおり、皆、アメリカではメディカルスクールの前にリベラルアーツの学校に行くということを意識していたという。その後、知っているだけでも3～4人は医学部に編入したし、ID04には少なくとも8人の医師がいるのだそう。もっとも、高校時代までの市野瀬さんの身の周りに医療関係者はいなかった。ではなぜ医師に？と聞くと、「当時、医師の質や医療の世界の硬直性が社会的に問題になっていたので、興味を持っていたのかもしれない」と答えてくれた。高校生の時から直接人のためにになりたいと思っていた市野瀬さん

にとって、そんな社会問題の解決を目指すことが、自然と自分の人生の目標のように思えたのかもしれない。

現在は東京科学大学（旧東京医科歯科大学）の血管外科に籍を置いている。血管外科に興味を持つようになったのは、弘前大学在籍中だった。とても良い先生に巡り合ったこと、診るべき病気の領域が広いこと、日本では「心臓」の付け足しのように扱われることもあるが海外では独立した分野で、日本では専門としている人があまりいなかったこと。もっとも、血管を診るということは全身を診ることであり、その人の生活全体を診ることにつながるという思いは強い。

だから本当は、医者は医学生の時分から、しっかり患者とその人となり、生活習慣としっかり向き合う経験を積むべきなのだ主張する。弘前大学時代アメリカの大学を訪れ、医学生がしっかりチームに組み込まれ、実践的に経験を積んでいるのを目の当たりにした。教授の治療をただ見ているのが「実習」であってはいけないのではないかという問題意識をずっと持ち続けている。

とはいえ、これまでのキャリアの中心には外科の実践があった。民間病院でシャントと呼ばれる動脈と静脈を繋ぎ合わせる手術などを数多く手掛け、腕を磨いてきた。しかし、やはり教育・研究にも関わりたいという思いは強く、東京科学大学で仕事をすることにした。まだ始めたばかりだが、大学院生を巻き込む教育体制が作ればと意欲を語る。講座には外国人の同僚や大学院生も多いが、そんなチームのコミュニケーションを促す側にいることに気づく時、ICUにいたからかなと思うことがあるという。臨床と研究は、科学・実験の対象ではない、人としての患者を中心に、教え、教えられるコミュニケーションをしっかりと取り、判断力を育む教育で結ばれるべきなのだ。

患者としての子供、その親、そして社会
——吉川 (旧姓：島田) 綾さん (45 ID01)

吉川綾さんも臨床と研究をつないで

いる。吉川さんは現在国立成育医療研究センターに勤める小児科医だ。ICU在学時はテニス部に所属し、国際関係学科でアジア研究の勉強をした。2年生の時には（故）新津晃一先生が引率するフィリピンでの社会調査実習に参加、3年次には1年間ベトナムに留学した。貧困の中で医療の手が届かずに目の前で子どもが死んでいくのを見て、大きな衝撃を受けた。自分に何ができるのか考えるようになった時、何であれ、自分にはしっかりとした軸が必要だと思った。それが医学かなと思ったのは、命に直接に向き合うことができ、そこを起点に、専門的な観点や哲学的な観点も含めて総合的に取り組むことができるのではないかと思ったからだ。

3年生の終わりには医学の道を志そうと決めたが、編入には間に合わず、1年浪人して医学部入学を目指した。ベトナムに留学すると言い出したあたりから親は少し遠巻きに見守ってくれているようになっていたので、就職せずに医学部へと言い出した時も特段大きな反応はなかった。本格的な化学の勉強は初めてで、楽しみながらの受験勉強だった。

宮崎大学に入学して思ったのは、医学部という所が職業専門学校だということ。皆同じ科目を順番に受けていく。小児科を選んだ理由は、幅広く全身を診ることができ、患者の親と話すことも多いので、親を介して社会と関わるという感覚を強く感じられるから。また、研修等を経た後、内分泌学と疫学も学ぶことにした。これは内分泌にかかわる問題が、急性疾患というより、生活の中で相談に乗りながらの診療を必要とすることから、患者やその親と長期に関係を築くことができると考えたからだ。意思表示が明確にできるとは限らない子どもが患者なので、親との付き合いはとても大事だ。いろいろな人がいるから、まさに異文化コミュニケーションの積み重ね。子どもが亡くなることもあるので、どうすれば両親が納得し、幸せになるのかをよく考える。

しばらくクリニックで一般診療をし

ていたが、この春から軸足を研究に移した。今勤めている国立成育医療センターでは、エコチル調査研究部に所属する。子どもの化学物質への曝露がその後の生育にどのような影響があるのか、十数年前から行われている10万人単位の子ども（とその家族）が対象のコーホート調査に関与している。これまで臨床の現場で診てきて思ったこと感じたことを還元できるのではないかという思いもある。臨床と研究の行き来も軽やかに構想し、真剣なまなざしが温かい吉川さんが、どんな研究成果を上げてくれるのか楽しみになった。

今回インタビューさせていただいたのはたったの5人。お一人お一人の歩みはそれぞれにしかない個性があった。ただ、それでもいくつかの共通点は感じずにいられなかった。人としての患者にしっかりと向き合おうとしていること。そのために医学を全体として理解し使いたいと考えていること。その必要をはっきりと表現し、そのために組織や分野の境界を超えようと試み、実際に超えていること。そのリスクと責任を、やりたいことをやっているという軽やかさで負っていること。今回はそんな人たちに話を聞くことができた。これがICUの与えたものかどうかは分からない。読者の皆さんはどう感じただろうか。

以下の関連情報もご覧ください
本誌vol.132の「Think globally, act locally」欄で、家庭医・小倉和也さん (40 ID96) を採り上げている。
<https://www.icualumni.com/alumninews/vol132>

今年のICU大学案内には、今年岡山大学医学部を卒業した兼城一媛乃さん (64 ID20) が紹介されている。
<https://www.icu.ac.jp/about/sources/>

「医療関係者の会支部」では運営メンバーを募集している。問い合わせは個隆さんまで。
<https://www.facebook.com/takashi.tsukuda>

今回 お話しいただいた 5人のプロフィール



加藤徹男さん

(34 ID90)

KATO, Tetsuo

茨城西南医療センター病院附属八千代診療所所長。2002年宮崎医科大学卒。日本プライマリ・ケア連合学会指導医・認定医、日本体育協会認定スポーツドクター、日本障がい者スポーツ協会認定医、日本医師会認定産業医。ご本人は謙遜するが、人間味溢れるキャラクターと、その地域社会への姿勢は、「赤ひげ先生」を思わせる。



三橋成輝さん

(35 ID91)

MITSUHASHI, Shigeaki

あけぼの診療所、北里大学漢方鍼灸治療センター。2000年信州大学医学部卒。日本内科学会認定内科医、日本神経学会神経内科専門医、日本東洋医学会漢方専門医。訪問診療は、新宿区を中心に都区部をほぼカバー。「診療では自分が救われることのほうが多い」と、謙虚かつ柔らかい物腰で、日々患者と向き合っている。



古井(旧姓:星)郁恵さん

(44 ID00)

FURUI (HOSHI), Ikue

東京女子医科大学麻酔科学教室助教。2004年島根医科大学卒。麻酔科専門医および指導医、ペインクリニック専門医、日本東洋医学会漢方専門医、日本緩和医療学会認定医。自他ともに認めるマイペースと、周囲を安心させる包容力で、私生活での育児を含めマルチタスクをこなしつつ患者さんのQOL改善にベストを尽くす。



市野瀬剛さん

(48 ID04)

ICHINOSE, Tsuyoshi

東京科学大学末梢血管外科特任助教。2008年弘前大学医学部卒。外科専門医、心臓血管外科専門医、脈管専門医、ステントグラフト指導医、日本血管外科学会認定血管内治療医、下肢静脈瘤血管内焼灼術指導医。誠実で丁寧なお人柄。「取材を受けてICUにいたことの意味を改めて考えることができた。ぜひ今後に生かしたい」。



吉川(旧姓:島田)綾さん

(45 ID01)

YOSHIKAWA (SHIMADA), Aya

国立成育医療研究センター所属。2008年宮崎大学医学部卒。東邦大学大学院修了(2024年)。小児科専門医、内分泌代謝科専門医(小児科)。日本小児科学会、日本内分泌学会等。「やりたいことがあるなら、やればいい。何とかなる」というポジティブな姿勢で、これからも子どもたちとその家族の笑顔を追いかけていく。

Critical Thinking

佃隆の「I Chiropractic U」 第2話

三鷹でカイロプラクティック院を開業したということや、同窓会活動に携わっていることもあり、当院には多くのICU生に来院いただいております。一般の患者さんとICU生の何が違うかというと、とにかく質問が多いんです(笑) 治療よりも質問に答えるのに時間がかかることもしばしばありました。それを当時の先輩のカイロプラクター(現在は妻)に伝え、「あなたもそうでしたよ(笑)」とのこと。人間というのは他人のことはさておき自分のことは認めたくなるもので、なるほど、それは素晴らしいICUの特性だと捉え直しました。カイロプラクティックという未知のものに対して、興味をもち、それが何なのかを知るために根掘り葉掘り質問をするわけですね。今までの病院や整体院との違いは何なのか、神経系を整えるというけれどなぜ病院では行わないのか、カイロプラクティック哲学というのは宗教とは何が違うのか。まさにICUで学んだCritical Thinkingを体現していることに気づかされました。

ひとつひとつの質問に真摯に答えながら、やがて質問されることの多くは似通っていることも分かりました。質問に明確に答えるために、最初はPowerPointの資料を作り印刷してお渡ししていましたが、やがてデザイナーの方にイラストを作成してもらい、オリジナルのカイロプラクティックテキスト全45頁を作成しました。あるクライアントさんから「中央線で三鷹駅に向かっている途中に、先日いただいたテキストを熱心に読んでいっしょの方がいてびっくり嬉しかったです」というお話をいただき、私も思わず笑みがこぼれました。

私の考えるCritical Thinkingは、愛らしい好奇心で、物事を多面的に捉えて、論理的に思考して物事の本質を捉えようとする態度や思考法です。一生モノである思考法を授けてもらったICUでの学びに、日々感謝をしています。

ファミリーカイロプラクティック三鷹院

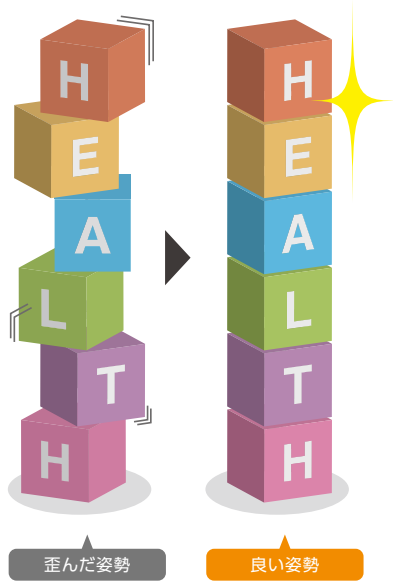
ICU卒業生の佃隆(2000年卒)とパートナーの佃美香が1993年より運営しており、毎年1万人以上の方が通院されています。三鷹駅南口徒歩1分の当院では、姿勢のゆがみと症状の関連性を見極めるカイロプラクティック検査を行い、症状の原因を特定し症状を改善していきます。お気軽に来院ください。

「ICUアラムナイニュースを見て…」とお電話ください。

tel 0800-888-4270

web <http://mitaka-chiro.com>

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-24-7 平嶺ビル301号室



DAY Interview

DAY賞 受賞者 同窓生へのメッセージ

2025年 第20回 DAY賞を受賞した3人のメッセージをお届けします。

翻訳（一部）：Benjamin Delfs（本誌） 写真：吉富祐一





神保哲生氏
(29 ID85 社会科学科、1985年6月卒業)
ビデオジャーナリスト、
ビデオニュース・ドットコム代表
JIMBO, Tetsuo (CLA29, ID85, Social Science)

1961年、東京都生まれ。15歳で渡米し、80年コロンビア大学に入学。その後、一時帰国しICUに転籍。85年、教養学部社会科学科卒。87年コロンビア大学ジャーナリズム大学院修士課程修了。クリスチャン・サイエンス・モニター、AP通信など米国の報道機関の記者を経て独立、99年、日本初のニュース専門インターネット放送局「ビデオニュース・ドットコム」を設立し代表に就任。記者自身がビデオカメラを用いて取材を行う「ビデオジャーナリスト」として、地球環境、国際政治、メディア倫理を中心に様々なテーマで映像レポートや著書などを発表している。趣味はラグビーで、桐蔭学園、ICU、コロンビア大時代はいずれもラグビー部でプレーした。

Tetsuo Jimbo - He was born in Tokyo in 1961. At the age of 15, Mr. Jimbo moved to the United States, enrolling at Columbia University. Mr. Jimbo then transferred to ICU, graduating from the Department of Social Sciences, College of Liberal Arts in 1985. Mr. Jimbo then returned to Columbia and earned master's degree in journalism at the Graduate School of Journalism in 1987. After working as a reporter for US news organizations such as the Christian Science Monitor and the Associated Press, Mr. Jimbo went independent and in 1999 founded "videonews.com", Japan's first video news station on Internet. As a pioneer in videojournalism, where journalists themselves use a video camera as a tool of reporting, Mr. Jimbo specializes in global environment, international politics, and media ethics, and produced a number of award-winning films. He has also authored and translated many books.

こんな時代だからこそ ジャーナリストを目指さないか

このたび、過分な賞をいただくことになり、非常に恐縮しています。私はただ一介の記者として日々取材を行い、その結果をレポートや番組という形で発信しているに過ぎない人間なので、決してこんな大層な賞をいただく立場

ではないと感じています。しかし、在校生の中にも私と同じようにメディアでのキャリアを考えている方がいるかもしれませんので、せっかくだから現在のメディアの状況とジャーナリストの役割について、私なりの考えを簡単に記しておきたいと思います。

今、メディアの役割が劇的に変化しています。そして時代はその変化が人類にとって良い方に傾くか、悪い方に傾くかの分水嶺に差し掛かっているように思うのです。

かつて、社会におけるメディア機能は限られた事業者によって独占されていました。新聞や雑誌などの活字媒体は宅配網や販売網が必要であり、テレビやラジオなどの電子媒体は放送免許が必要でした。このように、メディアがメディアであるためには「伝送路」が必要で、またそれが極めて希少価値のあるものだったため、メディア産業は他に類を見ないほど参入障壁が高く、既存のメディア事業者は長年にわたり、競争のない市場で独占的な地位を享受してきました。

しかし、1990年代にアメリカ政府がインターネットという新しい「伝送路」を誰でも利用できるように一般に開放したことで、この構造が根本的に変わってしまいました。これまでメディアを支配していた「伝送路の希少性」という前提が失われたのです。もちろん、地上波テレビ局や全国規模の宅配網を持つ新聞社は依然として有利な立場にありますが、メディアの選択肢が無限に広がったことで、最終的には伝送路ではなく、コンテンツの価値や魅力がメディアの優位性を決定する時代が訪れたことだけは確かです。

この「メディアの民主化」自体は、市民にとって望ましい進展だと思えます。メディアが少数の事業者によって独占されていたことの弊害も目に余るようになっていました。しかし、ここで問題が生じました。それは、特権的な地位を得て独占市場で大きな利益を得ていた既存のメディアが、初めて真の競争に晒されるようになったことで、かつて余裕のあった時代に大切にしていたジャーナリズムの本質的な価値である「公共性」などをかなぐり捨てて商業主義に走るようになってしまったことです。

既存のメディアが真に公共的なジャーナリズムを放棄する一方で、取材や報道といったジャーナリズムのノウハウは長らく既存のメディアに独占されてきたため、インターネットという新しい伝送路を利用して登場してきた新しいメディアの多くには、そのノウハウの蓄積がまったくありません。結果的に基本的なジャーナリズムを実践するメディアが無くなってしまったわけです。

そのようなメディア状況に危機感を覚え、私は2000年から「ビデオニュース・ドットコム」というニュース専門のインターネットメディアを主宰してきましたが、その経験からインターネットという新たな競争環境において、公共性の高いジャーナリズムを実践しながら、しっかりと収益をあげていくことは十分可能であることを確信しています。

しかし、そのためにはメディア企業の経営者はそのノウハウをゼロから習得しなければなりませんし、記者や番組制作者もコスト意識と競争力に対する厳しい基準を持ちながら、公共マインドを磨いていく必要があります。これは容易なことではありませんが、決して不可能ではなく、また非常にやり甲斐のある仕事でもあります。私はジャーナリズムは以前にも増してやり甲斐のある職業になっていると感じています。

ジャーナリズムの本質は、公共性と収益性を両立させることです。そして、もし人類がそれを実現できずジャーナリズムが衰退すれば、民主主義も死んでしまいます。それはトーマス・ジェファースンの言葉を借りるまでもなく、民主主義は主権者が十分に情報を与えられていることを前提とする政治制度だからです。昨今、世界中で民主主義が危機に瀕している主たる原因の一つは、新しいメディア環境の下で公共性と収益性を両立できるメディアが中々育っていないことにありと私は考えています。新しいジャーナリズムの実現の如何に民主主義の命運がかかっているといっても決して過言ではない、世界は今、そんな時代を迎えていると思います。

"Why not journalism now?"

The role of the media is undergoing dramatic changes. It seems that we are approaching a watershed where these changes could either benefit or harm humanity.

In the past, the functions of the media in society were monopolized by a limited number of operators. Print media such as newspapers and magazines required distribution networks, while electronic media such as television and radio required broadcasting licenses. Thus, for media to be media, a "delivery path" was indispensable, and because this was an extremely scarce commodity, the media industry had unprecedented barriers to entry. As a result, existing media operators enjoyed monopolistic positions in non-competitive markets for many years.

However, in the 1990s, the U.S.

government opened up a new "delivery path" called the Internet for general public use, fundamentally altering this structure. The premise of the scarcity of "delivery path" that had previously defined media control was lost.

This "democratization of the media" itself, I believe, is a desirable development for democracy. However, existing media, which had gained privileged positions and made substantial profits in a monopolistic market, began to abandon the essential values of journalism such as "public interest," which they had cherished in times of leisure, and turned to commercialism as they were exposed to true competition for the first time.

Concerned about such media conditions, I have been leading a news-oriented Internet media called "videonews.com" since 2000. From my experience, I am convinced that it is entirely possible to practice highly public journalism while making solid profits in the new competitive environment of the Internet.

However, to achieve this, media executives must learn such know-how from scratch, and journalists and program producers must polish their public minds while maintaining a strict standard of cost awareness and competitiveness. This is not an easy task, but it is by no means impossible, and it is also a very rewarding job. I feel that journalism has become a more rewarding profession than ever before.

The essence of journalism is to balance public interest and profitability. And if humanity fails to achieve this and journalism declines, democracy will die as well. It goes without saying, borrowing the words of Thomas Jefferson, that democracy is a political system based on the assumption that the sovereign has been adequately informed. Recently, one of the main reasons why democracy is in crisis worldwide is, I believe, that media capable of balancing public interest and profitability have not yet developed under the new media environment. It is no exaggeration to say that the fate of democracy depends on whether new journalism can be realized. I believe the world is now entering such an era.



星野博美氏

(32 ID88 社会科学科、1988年3月卒業)
作家、写真家
HOSHINO, Hiromi (CLA32, ID88, Social Science)

作家、写真家。ICU在学中に香港中文大学との交換留学のため香港に滞在。中国返還を挟む1996年8月から1998年10月に、改めて香港に暮らし、広東語で市井の人々と交流した日々を『転がる香港に苔は生えない』にまとめ、第32回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。祖父が晩年に残した手記をもとに、自身のルーツを遡り、江戸時代に紀州から房総に移住した祖先の足跡を辿った『コンニャク屋漂流記』で第2回いける本大賞、第63回読売文学賞随筆・紀行賞を受賞した。同じくその手記を紐解きながら、祖父の代から一家が住む地域を、自分の身体感覚から「大五反田園」と設定し、戦時下から現在に至るまで描いた『世界は五反田から始まった』で第49回大佛次郎賞を受賞。自分の延長として社会を観察し、客観と主観を織り交ぜながら、時に優しく、時に厳しく、時にユーモアを交え、時に痛みを伴って、世界を言葉と写真で表現し続けている。

Hiromi Hoshino; Writer and photographer. She lived in Hong Kong as an exchange student with the Chinese University of Hong Kong while a student at ICU. She lived in Hong Kong again from August 1996 to October 1998, between the China conversion, and wrote a book about her days there as “No Moss Grows in Rolling Hong Kong.” The book won the 32nd Souichi Oya Nonfiction Award. Based on a memoir left by her grandfather in his later years, she traced her roots back to her own ancestors who emigrated from Kishu to Boso in the Edo period, and published “Konyaku-ya Hyoryu-ki” (winner of the 2nd Ikeru Book Award and the 63rd The Yomiuri Prize for Literature). She also won the 49th Osaragi Jiro Prize for “The World Began in Gotanda”, which describes the area where her family has lived since her grandfather's generation from the wartime period to the present. Observing society as an extension of herself, she continues to express the world from her unique perspective in words and photographs, interweaving the objective and the subjective.

自分がICUから賞を頂くとは想像したこともなく、驚いている。

思い返せば、もう40年以上前の話になる。当時高校生だった私は、自分なりに「国際」という響きに憧れ、大学に行くならICU以外は考えられない、とまで思いつめていた。日本社会に慣れない、いる場所からどうしてもはみ出してしまう、そんな窮屈さが「国際」への憧れに拍車をかけた。当時私が脳裏に描いた国際的な光景は、様々な色の髪や瞳、様々な宗教を持つ異邦人たちが行きかう、唐の時代のシルクロードと長安だった(念のため言い添えるが、当時の長安がそれほど平和で融和的だったわけではないことを今は知っている)。

幸運にも念願の国際基督教大学に入学し、バラ色の大学生活が始まるはずだった。しかし私を待ち受けていたのは、シルクロードではなかった。もちろん多様な背景を持った学生や教授、講師の先生方はいて、他の大学とは比べものにならなかったが、根底に流れるアメリカの存在は否定しようがなかった。それが悪いと言っているわけではない。ただ、長安ではなかった。もっと東洋の存在感を私は求めていたのだ。はなから自分の選択肢の方向性がズレていただけのことである。

これはまずい。私は再び、ここから逃げることにした。そして逃げ込んだ図書館で見つけたのが、ICUが交換留学を実施していた香港中文大学の情報だった。香港……長安とは異なるが、まあいいか。そして1986年に香港へ向かった。

1986年、香港はまだ混沌の中にいた。中国で起きた文化大革命が収束してからまだ10年に満たず、文革から逃れてきた密航者も多く、あちこちに彼らの暮らすバラック村があった。戦禍から逃れたベトナムからの難民も多く、北と南に分けた難民村があった。ラクダや砂漠の光景とはだいぶ趣きが異なるが、異郷で暮らす人が多いという点で、香港は現代の長安のように見えた。

戦争に負けた記憶も薄れ、バブルに湧き、まるで世界の最先端にいるのは自分たち、とでも言いたそうな傲慢さと軽薄さが蔓延した日本から一歩出ると、これほど世界は異なって見えるのか。外の世界を知らなければ、いつまでも世界の中心でいられる。日本はそうなりつつあるように私には見えた。

異文化を知ることとはつまり、自分が世界の中心にいないと知る営みなのかもしれない。それが香港で学んだことだった。

大学を卒業して一度は一般企業に就職したものの、またそこでも日本社会

になじめず、逃げた。そして写真や文筆の世界に入り、はや36年。そこからは逃げていない。

異文化——。この言葉自体がすでに、「自」と「他」を分ける大変日本的な言葉であるが、それはさておき、今でもこの感覚は大切なものととらえている。

異文化交流とは、何も外国との文化交流に限らない。家族も含め、すべての他者は異文化である。たとえば私は今母を介護しているが、母の住む世界も異文化である。自分の価値観を押しつけるのではなく、相手が何を考え、何を欲しているかを異文化目線で想像し、落としどころを探っていく。そんな時に、香港で培った異文化経験が役立つている。

そんな気づきの機会を与えてくれた香港、そしてその選択肢を与えてくれたICUに心から感謝している。I'm surprised, having never even imagined I would win an award from ICU.

Looking back, the story started over forty years ago. My high school self, enchanted by my own particular idea of the ‘international', had strongly resolved that there was no college for me but ICU. Uncomfortable in Japanese society, I felt the need to escape; it was this discomfort that fueled my enchantment with the ‘international'. And back then, the image I had cultivated involved peoples with different religions and hair and eye colors mingling harmoniously – a true Tang Dynasty Silk Road and Imperial Chang'an! (Although I now know that these places weren't as harmonious or peaceful as I then thought.)

Happily, I entered my desired ICU, and I was sure my rosy student days were set to begin. But the place waiting for me was, simply put, not a Silk Road. Of course, there were students and professors with diverse backgrounds – much more than one could ask for at another university. But still, the presence of the United States was undeniable. I'm not saying that was a bad thing. But it was no Chang'an. The person who I was had wanted to feel the presence of Eastern civilizations. And the direction of my choice appeared to have strayed.

This won't do, I resolved. I decided again to escape. And in the library that I escaped into, I found out about ICU's exchange program with the Chinese University of Hong Kong. Hong Kong!

It wasn't quite Chang'an, but, oh well. I headed there in 1986.

And in 1986, Hong Kong was in chaos. It hadn't even been a decade since the Cultural Revolution ended on the mainland. The many refugees who had crossed from there filled shanty towns left and right. From Vietnam, too, refugees from that war populated migrant slums divided North and South Vietnamese. There were certainly no deserts or camels anywhere, but in the sense that it had lots of people congregated from distant lands, Hong Kong seemed to me like a modern Chang'an.

As the memory of losing the war faded, and it reveled in the Bubble Era, people in Japan seemed to haughtily and frivolously believe that they were on top of the world. But with just one step off the island, I was amazed at how different the world seemed. If you don't know the outside world, you'll always think you're at the center of it, and it seemed to me like that's how Japan was becoming.

Learning a foreign culture might just be the work of learning that one isn't at the center of the world. That's what I learned in Hong Kong.

After graduating, I tried working for a company, but I again felt that I couldn't get used to Japanese society there, so I escaped. It's been 36 years now since I entered the world of photography and literature. I haven't ever run away from that.

"Foreign culture" – the concept presumes, in a very Japanese way, the existence of ‘one's own' and ‘the other'. But ignoring that for the moment, I still think that it's an important and meaningful concept.

Exchange and learning between foreign cultures aren't restricted to cultural exchange between countries. Everyone, including family, is a foreign culture. For example, I'm now taking care of my mother, but the world she lives in is a foreign culture. Rather than imposing our own values, we should try to imagine what another might think and want through a ‘foreign culture' mindset and feel for common ground. At these times, the foreign cultural experience I cultivated in Hong Kong is extremely helpful.

To Hong Kong, which gave me the chance to realize this, and to ICU, which gave me the choice to pursue it, I am profoundly and deeply grateful.



石山アンジュ氏
(56 ID12 アーツアンドサイエンス学科、2012年3月卒業)一般社団法人シェアリングエコノミー協会代表理事、一般社団法人Public Meets Innovation代表理事
ISHIYAMA, Anju (CLA56, ID12, Arts and Sciences)

2012年にICUを卒業後、新卒でリクルートに勤務し、その後クラウド事業に参画。2018年にはミレニアル世代に焦点を当てたシンクタンク、Public Meets Innovationを設立し、代表を務める。また、デジタル庁シェアリングエコノミー伝道師をはじめ、多数の公職を通じて、政策の推進や規制緩和に関与し、政府と民間の架け橋としての役割を担っている。さらに、一般社団法人シェアリングエコノミー協会代表理事としても活躍中。テレビ朝日「羽鳥慎一モーニングショー」などにコメンテーターとして定期出演し、また著書には『シェアライフ-新しい社会の新しい生き方』がある。シェアリングエコノミーを通じた社会の未来を描くなど、幅広いメディア活動を展開、「シェア」の思想を通じて、新しいライフスタイルの提案に尽力。

Anju Ishiyama; She is a social activist and a prominent figure in Japan's sharing economy landscape. She has dedicated her career to advocating for and promoting the principles of the sharing economy throughout the country. Her efforts extend beyond spreading awareness; she is actively involved in regulatory reform and policy-making to create a supportive environment for sharing initiatives.

As the founder of Public Meets Innovation Japan, a think tank established in 2018, Anju plays a pivotal role in shaping discussions among millennial leaders. She holds significant public roles. She serves as the representative director of Sharing Economy Association Japan, where she bridges the gap between government policies and private sector innovations. Her contributions are vital in facilitating dialogue and cooperation among various stakeholders in the sharing economy. Additionally, as a Sharing Economy Evangelist for the Japan Digital Agency, Government of Japan, she acts as a key link between government initiatives and public interests, guiding the nation toward a more integrated and sustainable sharing economy. Anju's insights and experiences are captured in her book, "SHARE LIFE - Dive into Sharing Economy," and she frequently shares her expertise as a commentator on leading TV news shows. Furthermore, she is a member of the World Economic Forum Global Future Council Japan. Her work continues to inspire and advance the sharing economy movement in Japan and beyond.

「複雑で曖昧なこの社会を抱きしめる力」——これこそが、私にとってのリベラルアーツであり、ICUで学んだ真髄そのものです。

私は現在、社会起業家として、大学在学中には想像もできなかった日々を送っています。シェアリングエコノミーという新たな経済概念を普及する団体の代表として、ビジネス、政策、ライフスタイルに変革をもたらす活動を展開するほか、社会を変えたいと志す若者が法律や政策に働きかけるスキルを習得するルールメイキングスクールの運営、血縁や制度に囚われない家族の形「拡張家族」コミュニティやシェアハウスの運営、テレビコメンテーターや大企業の社外役員としても活動し、官民・公共・社会の垣根を越えた多様なフィールドで挑戦しています。よく「何をやっている人なの？」と問われますが、私の軸は、正解の見えないこの時代に何が本当に必要かを徹底的に探り、仲間とともに社会に足りないものを創造することにあります。

まだ誰も見たことのない未来を描き、人々に伝え、実現していく過程では、理解や共感を得られず、日々挫折することもあります。しかし、そんなときもICUでの学びが、私に勇気と指針を与えてくれているのだと感じます。ICUで得たものは、単なる技術や知識ではなく、社会に向き合うための姿勢と哲学です。国籍、言語、宗教、イデオロギーといった多様な背景を持つ仲間たちの中で学ぶことで、「正解は一つではない」と気づかされ、多面的かつクリティカルに物事を洞察し、相手の立場に立って考え、ときには自分の考えを柔軟に変える力を身につけることができました。

私がICUに入学を希望した理由は、「どうしたら世界平和は実現できるのか？」という問いの答えを求めるためでした。平和研究を専攻し、学べば学ぶほど理想と現実の狭間に絶望し、一度は希望を失いかけたこともありましたが、世界各地を訪れて多くの人々と対話を重ねる中で、人は互いに寄り添い、対話することで未来を切り拓けるという唯一の希望を見出しました。複雑な社会を抱きしめ、対話を重ねる力こそ、私たちが未来に向けて築くべき最も大切なものだと思っています。

今、社会は混迷を極め、経済も政治も複雑化しています。ICU生だからこそ、私たちはその環境で培った学びを活かし、社会をより良い方向へ導く力を持っているはずです。あのキャンパスで交わした言葉や経験は、一生の宝物であり、決して色褪せることはありません。これからも、共に複雑で曖昧な社会を抱きしめ、未来を切り拓いて

いく仲間として、互いに刺激を与え合いながら歩んでいきましょう。皆さんのさらなる活躍と未来への挑戦を、心より応援しています。

The liberal arts education at ICU empowered me to truly and lovingly engage with the at times complicated and ambiguous society of today. Through dialogue with friends of diverse nationalities, religions, and languages, I realized that “there is no one exclusive right answer,” and I cultivated a flexible mindset and critical perspective. As a result, I was able to launch my current career of advancing societal reform on diverse fronts, including my work to push the adoption of a sharing

economy, run a rulemaking school, realize a wider ‘extended family’ community, and function as a television commentator and unaffiliated corporate director. My study at ICU became a precious treasure, not just because it imbued me with knowledge, but for its gifting me with the perspective and philosophy to engage society on my own terms. In these troubled and confusing times, we ICU students should remember the conversations and experiences we shared on that beautiful campus, and work together as friends to open up a better future for us all. I am excited to support everyone's continuing success.

通 訳・ 翻 訳

37年の経験と実績

募集！
通訳者・翻訳者

We need your help!

現役でご活躍中のICU同窓生のみなさまのお力をお貸しください。

● 通 訳

東京・横浜のほか大阪、名古屋、福岡でのお仕事もあります。
オンサイト／オンライン(英語・仏語・アジア言語ほか)

● 翻 訳

IR資料／金融／会計／法律など(英語・仏語・アジア言語ほか)

● チェッカー

英語・仏語

お問い合わせは

三枝雅恵 (Ms. Masae SAEGUSA, President) まで
☎ 090-7176-6500
URL:https://www.exim-int.com
※通訳・翻訳のお仕事のご相談・ご依頼も歓迎します。

翻訳・通訳・制作(デザイン・印刷)

(株)エクシム・インターナショナル
EXIM INTERNATIONAL, INC.
〈東京事務所〉〒105-0013 東京都港区浜松町2-1-16 第3粕谷ビル 3F E-mail : tokyo@exim-int.com
CEO 永島 克彦 (14期) Advisor 比奈地 康晴 (14期)

ICU Mascot
HACHIRO
LINE Stickers

はちろうスタンプつくりました！

16 stickers

ありがとう

OK!

Zzz

《LINEクリエイターズスタンプ》で
ICUはちろう と検索！
QRコードからもアクセスできますー

学内施設貸出

学内イベント
ケータリング紹介

国際基督教大学事業会社
株式会社ICUサービス

国際基督教大学内 D館西棟2階
0422-33-3530 (weekday 9:00-17:00)
info@icu-service.com

09



左から／大学礼拝堂で開かれた総会／ICU同窓会 桜祭り懇親会



事務局業務の大学への委託などを報告 2025年桜祭り

文：長谷川由紀（本誌） 写真：吉富祐一

2025年の桜祭り（同窓会総会・DAY 賞表彰式、19期生卒業50周年記念式典などの総合イベント）が3月29日、大学礼拝堂で行われた。総会では、「明日の同窓会」プロジェクトの報告も行われ、同窓会の事務局機能を4月から大学に移管することなどが紹介された。

総会は対面とライブ配信のハイブリッド方式で開かれ、礼拝堂には69人が参加した。ライブ配信には73人の申し込みがあった。

総会では2024年度の活動報告と決算報告、2025年度の活動計画案と予算案の説明が行われた。

廣岡敏行会長（31 ID87）は、これまでハイブリッドなどを組み合わせながら活動してきた経緯などを説明。昨年のホームカミングには600人を超える参加があったとした上で、大学との

結び付きやネットワークの強化のため、より多くの同窓生がキャンパスを訪れる機会を増やしたいと述べた。

また、新たに地方創生支部、ICU国連の会支部、建築・環境支部の3つの支部が設立されたことを報告したほか、未来予想ZOOやお茶会の開催や、奨学金など学生支援のための活動、大学との連携強化などにも引き続き取り組んで行く方針も示した。

新年度予算案については、4月から大学に事務局の業務が委託されることに伴う費用について説明があった。質疑応答では、業務委託に至った経緯や委託費に関する質問も出たが、昨年度の活動報告・決算報告、新年度の活動計画案・予算案はいずれも賛成多数で承認された。

廣岡会長は「明日の同窓会」プロジ

ェクトについて報告を行い、立ちあげから3年で事務局の業務委託を実現できたとして、同窓会理事や過去の同窓会関係者、大学側の担当者、事務局のスタッフら活動を支えてきた関係者に感謝した。

会場では新しい事務局員3人が紹介され、新事務局長の岸本誠さんが「ICUで42年間働いてきた。同窓会の活発な活動は大学全体に寄与し、学生のためにもなっている。事務局という立場で貢献していきたい」と抱負を語った。

廣岡会長は、これまで同窓会活動を支えてきた池島広子事務局長（27 ID83）はじめ事務局スタッフを紹介しながら貢献をねぎらった。

総会に続いて行われたDAY賞の授賞式では、ビデオジャーナリストで

ビデオニュース・ドットコム代表の神保哲生さん（29 ID85）、作家・写真家の星野博美さん（32 ID88）、一般社団法人シェアリングエコノミー協会代表理事の石山アンジュさん（56 ID12）の3人に賞が贈られた。

卒業50年目式典では、参加した19期生36人を代表して、元高校教諭でICU教育セミナー支部支部長の三橋洋二さんがあいさつし、在学時にフィルムクラブで海外映画などの上映会を開いていたことに触れ、資金繰りの苦労など当時の思い出を語った。

大学食堂で開かれた懇親会では、廣岡会長が改めて事務局スタッフの紹介し、これまでの貢献に感謝を述べた。この日はあいにくの雨模様で肌寒かったが、桜が見ごろを迎える中、多くの同窓生が話にも花を咲かせていた。

ICU卒業生、続々と結婚が決まっています！

他社やアプリで苦戦していた方々が、ラポートで次々にご成婚！

- ・30代男性：他社で2年、お見合い成立率2～3% → ラポートで48%にUP、**3.5か月でご成婚！**
- ・30代女性：他社でお見合いやデートが「苦痛」 → 毎回楽しい♡に変わり、**5か月でご成婚！**
- ・20代女性：アプリで出会った彼は結婚願望なし → 最高の相手と出会い、**5か月でご成婚！**

ICU卒業生の婚活、応援中！

ICU卒業生限定 特別価格

初期費用 ~~77,000円~~ → **33,000円** (税込)

※他に月会費 11,000円とご成婚料（通常の半額）が必要です

POINTS

- 業界最大級の結婚相談所連盟に加盟
- 紹介できる登録会員は約 **84,000人**
- 東京都大田区を拠点に**全国オンライン対応**

元ICU生の会員・入会時の声

無料コンサルで「この方は味方になってくれそう」という直感が働き入会を決めました。

話を丁寧に聴いてくれる。その中で私の長所などを分かりやすく言語化してくれるのでありがたいです。

とても親切で話しやすく、相談所の規模や、心理学を用いたサービス内容も気に入りました。

圧倒的な味方として、親身になって労ってくださったり、適切なアドバイスをいただけてとても感謝しています。LINEでいつでも相談できるので大変ありがたいです。

結婚相談所 ラポート
RAPPORT
代表 古川 美穂子（旧姓：山沢）
2002年ICU卒業



昨年9月と今年3月の募集では、たくさんの方々からのご入会やお問い合わせをいただき、誠にありがとうございました。今後も、ICU卒業生同士のマッチングに力を入れていきます！

ご興味をお持ちの方は

- 1 公式LINEにご登録
- 2 古川の自己紹介動画をご視聴
- 3 無料コンサルにお申し込みください



公式LINE



成婚者の声



「同窓生の皆さんを待っています！」と意気込む事務局スタッフ

事務局業務の大学への委託がスタート

文・写真：長谷川由紀（本誌）

同窓会の事務局機能が4月から大学に移管された。新体制は、岸本誠事務局局長はじめ常勤の職員3人と、これまで同窓会で雇用していたパート勤務の4人でスタートした。パートの大町朝美さんが7月末で退職し、現在は6人で同窓会員や活動を支える。

事務局機能の移管は、将来の同窓会のあり方を考える「明日の同窓会」プロジェクトなどでの議論の中で浮上し

た。業務量の増加や任意団体としての活動の限界など様々な課題を抱える中、活動の支援体制を強化するとともに大学との連携を強め、重複業務削減など業務の効率化も図ることで、持続可能でより活発な活動につなげるのが狙い。

2024年11月16日に開いた臨時総会で、大学に業務委託することが賛成多数で決まった。同窓会の意思決定は引き続き理事会が行い、組織や活動、

会員サービスなども基本的に変更はない。

岸本事務局局長は「新しい体制になってIT周りの改善や業務の効率化などについて検討を進めている。会員のみなさんにとってワンストップの窓口になれるよう取り組んでいきたい」と意気込む。

同窓会の理事は現役で働いている者も多く、夜間や週末の活動もあるが、

スタッフの仕事を調整するなど工夫しながらサポートしている。「まずはより多くの同窓生にキャンパスに足を運んでもらい、知ってもらいたい。そのために情報発信も強化していく」。キャンパスを訪れる際はぜひアラムナイハウス内の事務局ものぞいてみてほしい。

事務局スタッフより同窓生の皆さんへ！

岸本：この4月よりICU同窓会事務局長を務めております。ICU同窓会は会員数3万人超の大きなコミュニティです。ICUの同窓生は、けっして群れることを好みませんが、深い部分で強くつながっていると感じるものがしばしばあります。おそらく、濃密な学生生活を過ごした体験を共有しているからでしょう。その人と人とのつながりを育み広げていくことが同窓会事務局の大きな役割だと思います。同窓生の方々はもちろんですが、学生の皆さんの来室をスタッフ一同お待ちしております。

松島：キャンパスの緑の真っ只中にあるオフィス（アラムナイハウス2階）で、1桁台の同窓生から在学生までの多様な背景、経歴、見識と出逢うことができるという得難い経験をさせていただいています。同窓生の皆様からのお問い合わせに最初に接する“First Contact Point”であるという自覚を持って、会員一人ひとりに寄り添った対応を心がけます。

鶴留：引き続き財務部のお仕事をさせていただきます。新体制では同窓会の会計業務を税理士法人に委託しており

プロの力も活用できるようになりました。システムが大きく変わるこの機会に、引き続き財務部の理事と評議員の皆様にご指導いただきながら、新事務局長の岸本さん、新担当の濱本さんと一緒に会計業務をより合理的でサステナブルなものにできるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

榎木：2023年1月から事務局の仕事をさせていただきました。同窓生の深く温かい絆や、同窓生のご活躍、そして、次の世代を応援する熱い思いにふれる機会が多く、とても貴重な経験をさせていただいています。同窓生のネットワークがさらに広がり、大学、同窓生、在学生を支える力になっていくことを願っております。

濱本：みなさま、こんにちは。4月から総務部・財務部・DC部・DAY賞を担当しております。理事・評議員の皆様

様による運営を支え、より多くの在学生や同窓生が利用できる場の提供を心がけております。10月開催のICU祭では、アラムナイ・ラウンジにてみなさまが寛げるカフェを開く予定です。他にも一年を通して様々なイベントを企画しておりますので、是非懐かしの母校に足をお運びください！

岡本：学生部・広報部・組織部・大学募金事業部を担当しております。以前はICUの広報・社会連携部にて、受験生向けの広報や高大接続事業のイベント運営に携わっておりました。大学と同窓生の皆様をつなぐ架け橋として、一層の同窓会の発展とICUコミュニティの充実に貢献できればと願っております。大学の今を同窓生の皆様にお伝えするとともに、同窓会の温かなつながりと素晴らしい活動を在学生・教職員の皆様にも広く知っていただけるよう努めてまいります。

松本中央法律事務所



弁護士
松本 典子
MATSUMOTO, Noriko
理学科生物学専攻卒業（ID01）

📍 東京都中央区日本橋小網町8-2
☎ 03-5776-2435
✉ info@m-laws.jp
🌐 www.m-laws.jp



【取扱分野】企業法務一般・契約締結交渉・英文契約書・離婚・男女問題・労働問題・遺言・相続・個人情報保護対応・環境問題・債務整理・刑事弁護・各種研修など

懇切丁寧に対応致します。
お気軽にお問い合わせください。

担当一覧

岸本誠	—— 事務局長
濱本ハル	—— 総務部、DC部、財務部、DAY賞選考
岡本有起	—— 大学・募金・事業部、広報部、学生部、組織部
松島真理	—— 大学・募金・事業部、組織部、DC部、DAY賞選考
鶴留素子	—— 財務部
榎木りら	—— 大学・募金・事業部、広報部

大町朝美さんは7月末で退職されました。これまでのご貢献に感謝いたします。

Think globally, act locally.

“ここ”から始まるストーリー

国内の“ある場所”で活躍する仲間にスポットを当て、その活動や経緯などについて話を聞く本シリーズ。
今回は、石川県小松市の日本基督教団小松教会で牧師を務めている松島保真(ほさな)さんにお話をうかがった。

牧師にだけはなりたくなかったはずが……

石川県 日本基督教団小松教会 牧師 松島保真さん (40 ID96)

文：新村敏雄(本誌) 写真：新村敏雄(本誌)・本人提供



MATSUSHIMA, Hosana

1973年福島県生まれ。小中学校は広島県、高校は新潟県で過ごし、ICUでは演劇など表現活動に傾倒。卒業後はアフリカのアンゴラで内戦による孤児のためのボランティア活動に従事。帰国後学生時代に情熱を注いだ演劇の道を志すも断念。偶然の出会いから牧師になると決心。東京神学大学神学部編入、同大学院修了。2006年4月より石川県の日本基督教団小松教会に赴任し、現在に至る。

父が牧師だったことが 与えた影響

小中学校は広島県の庄原というところにいましたが、牧師だった父の仕事柄、たとえばみんなが神社に行くときに行かないとか、日曜は必ず礼拝に行くとか、思春期あたりから周囲との違和感を意識するようになりました。特に中学校は荒れていていじめなどもあったので、目をつけられないように自分を抑えていました。屈折した中学時代でした。

そんな地元から抜け出たくて、高校は新潟県にあるキリスト教系の敬和学園高校に進学しました。4人部屋の寮での生活でした。その後も、ICUの第二男子寮で4年、東京神学大学の学生寮での4年を合わせると11年ほど寮生活になりました。寮での共同生活は、自分と全く違う価値観を持つ他人と共に生きる面白さと難しさを体感し、その後の人生に大きな影響を与えました。

演劇との出会い、 ICU進学へのヒント

高校では土曜は授業がなく、先生がご自分の得意分野について講座を開くのですが、私は演劇の講座に出ました。中学までは自分を抑えていたものの、高校には自分のことを知っている人はいない。演劇では演じている時は自由で、自分ではない誰かになれる。そんなところに惹かれました。高校では毎年、体育祭と文化祭を合わせたような「フェスティバル」という行事があり、ダンス、応援、パネルなど5つぐらいの部門に分かれて学年縦割りのチームを作って発表するのですが、私は3年間、演劇部門に参加しました。

高校には後に日本聾話学校校長などを務められた安積力也先生をはじめICU出身の先生が何人かおられて、安積先生の語る言葉の自由さ、ユニークさに憧れてICUを受験、第二男子寮に入ることになりました。入ってみて「すごいところに来てしまった」とは思いましたが、寮にはロシア、韓国、アメリカ、オランダなどからの留学生がおり、共に暮らす中で様々な刺激を受けました。

興味は演劇から モダンダンスへも

専攻は人文科学科で金澤正剛先生がアドバイザーでしたが、芝居にのめり

込み、恥ずかしながらアカデミックなことはほぼ何もしていなかったに等しいです。劇団黄河砂に参加して鴻上尚史の「ハッシャバイ」、つかこうへいの「飛龍伝」などに出了ました。

3年の秋には、言葉（セリフ）なしで身体表現で感動させるダンスに感銘を受け、「やらずに後悔するよりやって後悔するほうがいい」とモダンダンス部にも参加し、半年ほど練習して公演にも出ました。男子は少なかったですけど。

宗教音楽の大家である金澤先生には今思うと本当に申し訳なかったのですが、卒論は「チンドン屋の歴史と音楽」で提出しました。当時はユダヤ人のクレズマーとか、民族音楽に興味があり、それが高じてチンドン屋を追いかけて録音させてもらって分析しました。

モダンダンスは 思わぬ出会いにつながった

同級生たちが就職活動で奔走していた大学4年の夏にモダンダンス絡みでポーランドのワルシャワへ踊りに行きました。モダンダンスから舞踏へ関心が移り、大野一雄や土方巽を輩出したスタジオが企画した半年ぐらいのワークショップに参加したのですが、終了後、ポーランドに行くというオーディションがあり、申し込んだら通ってしまったのです。マグダレーナ・アバカノビッチ（2017年没）という現代美術の第一人者がワルシャワの現代美術館で開催する展覧会に合わせたの公演でした。彼女はホロコーストで両親を殺害されたのですが、モチーフの一つが麻布を使った、頭と腕がなくて背中だけを見せる人の群像です。その像が動くというコンセプトによるパフォーマンスを1995年11月に屋外で演じました。公演の前に初めてアウシュビッツの資料館やビルケナウを訪問したのですが、資料館を訪れてホロコーストの残酷さに胸が締め付けられるようなショックを受け、言葉が出てこず、帰国後もしばらく放心状態でした。

卒業後、就職はせずに アフリカへ

卒業直前に本館の廊下に貼ってあった「アフリカで働こう」というポスターにひかれ、卒業後デンマークに拠点のあるNGOに参加し、4か月研修を受けてから当時内戦が停戦中だったアンゴラで衛生教育や公衆トイレを作るボランティアに飛び込み、7か月ほど従事しました。オランダ、スウェーデン、イギリス、ドイツなどいろんな国の人が来ていました。デンマークに入る前とアンゴラに行く前に、第二男子寮でお世話になった吉成吾郎さん（39 ID95）のお宅に泊めていただきました。



左から／アンゴラの生徒たちと音楽を楽しんだ／学生時代には演劇に熱中した

アンゴラのボランティアワーカーの宿舎には、24時間銃を持ったガードマンが立っているなど治安は悪く、夜は電気もなく、水は沸かして飲んでいました。世界で2番目に多くの地雷が埋まっていると言われる国です。マラリアにも2回感染し、特に2回目はきつくて、治療薬による幻覚なのかもしれませんが、小さい時に会った人から最近の人まで顔が次々に浮かんできて。最後に両親と弟が出てきて泣けてきました。その時、死への恐怖と、自分が生かされている、いろんな人に支えられていることを実感しました。同時に、

もう一つ、日本語を話すのが自分一人だけだった環境で、言葉に支えられてきたことを実感しました。短波放送で1日1時間、日本語が聞けたのですが、言葉に対する飢えがすごかったです。そんななかで、日本語を使って日本でできることをしよう、と思うようになりました。

帰国して再び役者を志すも……

1997年秋にアンゴラからヨーロッパ経由で帰国後、アンゴラと日本の生活のギャップに戸惑い何もする気が起きず、半年ほど広島の実家にひきこもっていました。当時はちょっと鬱っぽかったかもしれませんが。その間に牧師である父の仕事ぶりを初めて間近でみて、改めて父に対するリスペクトが生まれました。

そんな状態から抜け出せたきっかけは、毎年1月に行われる第二男子寮同窓会の餅つきに思い切って参加したことでした。就職もせず半年も実家にいる自分が恥ずかしいと思っていたのに、行ってみたら寮の仲間たちはいつもと変わらずに接してくれて、自分で自分を追い詰めていたことに気がつけまし

た。

帰りの電車の中で情報誌の『ぴあ』を見ていたら、ICUの大先輩、奈良橋陽子さん（13）が主催する演劇学校の広告に目が止まり、どうせ死ぬならやりたいことをやろうと思って再び上京し、1期生として飛び込みました。やりたいことがやれている充実感はありませんでしたが、なかなか芽が出ず、4年で行き詰まってしまいました。

石垣島での体験から まさかの牧師に

そんな時に、当時通っていた松沢教会（世田谷区）の青年研修で、宮古島にある宮古南静園というハンセン病療養所を訪ね、かつて差別され隔離された状況を改めて知って衝撃を受けました。クリスチャンの元患者さんにもお会いしてお話を聞きました。その方が苦しい時に慰められて、クリスチャンになったきっかけが、イエスが重い皮膚病の患者に触れて癒す聖書箇所だったと語られました。研修が終わったあと、予定がなかった私は父の知り合いの牧師が勤めている、石垣島の八重山中央教会を訪ねました。そこで出席した礼拝で、エレミヤ書第20章が読まれました。それは預言者であるエレミヤが神のために働くことをやめたいと思っていたのに、やめられず、「神様、私は負けました。あなたの勝ちです」と神に語りかける箇所でした。また、ある信徒の方から聖書に関して質問されても答えられず、「自分は聖書のことを何も知らない。もっと聖書のことを知りたい」と思われました。そしてその方に「することがないなら牧師にでもなったら」と言われました。卒業後は牧師以外の道を模索してきたけれど、宮古島や石垣島での様々な経験を通して牧師への道を改めて示されま

した。これが私にとっての「召命」だったと思います。そして、その翌年にICUの隣にある東京神学大学に入学しました。29歳でした。学生は下は高卒の10代から、上は仕事をリタイアした70代まで、前職も銀行員、教師、福祉施設職員などいろいろな人にまじって4年間勉強し、2006年に当時牧師がいなかった小松教会に赴任しました。

2024年の地震後の能登

石川県を含む北陸は浄土真宗の信仰が盛んな「真宗王国」です。そうした土地で福音を伝えていくことには、地域に根付く風習などとの葛藤もありますが、やりがいもあります。

2024年元旦の能登半島地震の時は小松も震度5ぐらいの揺れに襲われましたが、小松教会は東日本大震災後に調査した結果、耐震強度がないことがわかり、2016年に教会堂を建て替えていたので幸い無事でした。

能登半島には日本基督教団の教会は七尾、羽咋（はくい）、輪島の3か所にあり、輪島教会がいちばんひどい被害を受けています。能登にある教会の信徒数は少なくとも、やはりそこに教会がある意味は大きいので、再建に向けて全国の教会から祈りと献金がさざがられています。

5月31日に当教会を会場に開催された北陸支部会では、炊き出しや学校への出張カウンセリングなど、卒業生たちが関わっている被災地ボランティアの報告がありました。また被災地支援のために能登の食材の物販も行われました。復興までは長い道のりなので、今後も地道に支援をし続けていければと思います。



被災地で生きる その後

地震からまさかの大水害

それでもここで生きる

石川県輪島市 北崎 裕さん (40 ID96)

6月に石川県小松市の日本基督教団小松教会の松島保真さんの取材に行き、せっかくならばと足を伸ばして、本誌vol. 141で取り上げた輪島市の北崎裕さんにもお会いさせていただいた。北崎さんは2024年元旦の能登半島地震により、オープンから半年のオーベルジュ「茶寮柚径（そまみち）」が大きな被害を受け、輪島市門前町の飯店舗でレストラン「海辺の柚径」を同年9月に再開する、とvol. 141ではご紹介した。

文・写真：新村敏雄（本誌）



輪島塗の器で供される料理

2021年にオープンした「茶寮柚径」は曹洞宗大本山の總持寺祖院にほど近い山間部にあったが、「海辺の柚径」はその名前のとおり、日本海の海岸沿いの集落に位置する。車で向かったが、近くを流れる小さな川の河口にかかる橋の周辺は昨年の豪雨の痕跡が痛々しい。能登地方特有の、光沢のある黒い瓦で屋根をふいた民家が肩を寄せ合うように続く路地の奥に、目指すレストランはあった。

落ち着いた木造の外観、広々とした室内。迎えてくれた北崎さんによると、元は外国航路の船員が生活していたというゆったりした日本家屋は、北崎さんとオーベルジュのオーナーで輪島塗の塗師、赤木明登さんが、自身の出版事業の拠点として確保していたもの。オーベルジュは地滑りで建物が傾いてしまい、地盤から直す必要があるが、再建の検討を重ねるも、敢えなく解体されるという。

この日は4人で訪れたが、たまたまヘルプのメンバーがお休みで北崎さんお一人ですべて対応いただいた。大きな輪島塗の器にひとつずつ丁寧に調理された季節のさまざまな野菜をおさめ、小鉢、ご飯、汁椀と共に供されるラン

チ。ゆったりと食事をしたあと、お話を伺うこともできた。

「海辺の柚径」は昨年9月11日にオープンした。中心にある柱が地震で傾いてしまったこの家屋を改装するなど準備には相当な時間がかかったが、同月21日にあの未曾有の水害が発生。この地区も近くの神社の裏山が崩れて道路をふさぎ、そばを流れる川はあちこちで決壊したという。結局再度のオープンには11月になってしまった。

海外のゲストから 思いもよらない質問

地震と水害からの復旧は今も能登半島全体で続いている。金沢から半島エリアに入ると、傾いたままの家屋や補修で速度制限された道路が至る所で見られる。それでも、「海辺の柚径」には、どこで情報を入手したのか、長期の休暇を取っている外国人旅行者も、フランス、スペインなどから結構訪れるという。そして、予想もしないようなことを聞いてくる。

「複数の日本料理の有名店にも行ったという人が、他の情報に惑わされことなく、自分の感性に従って鋭く切り込んでくることがあります。『日本の料理はだし文化で、お椀がメインになるような料理もいただいできて

確かにとてもおいしいと思った。でも、あなたの料理はだしを使っていないのはどうしてですか?』と聞かれたときは本当に驚きました」

北崎さんの料理のだしは昆布、椎茸、そして玉ねぎを少し入れるが、鰹節は使わない。甘い調味料も素材の味に勝ってしまうので控える。「地域の日常の料理でそんなにふだんから鰹と昆布をぜいたくに使うことはしないだろうから」と説明すると、その客は納得し

てくれたという。

日本料理だけをやりたい、と思ったことはない、という北崎さん。「日本の美術に関心を持ち続けるには、いろいろな考えたあげく、日本料理を勉強することで茶道、建築、庭園などの文化がつながってくる、と気がついたことで今の自分があります」

「海辺の柚径」では、1年半後ぐらいを目標に、隣の家屋を宿泊棟にすべく動き出している。

特別な日を彩る、
世界中でただ一つの
オーダーメイドスイーツ

ウェディングやお誕生日、さまざまな記念日に、
メイプリルのスイーツやフィンガーフードが
「ワクワク」と「幸せ」、そして「笑顔」をお届けします

●公式サイト
https://mapril.net/

●Instagram
@mapril_sweets
https://www.instagram.com/mapril_sweets/

スイーツデザインスタジオ メイプリル
東京都杉並区西荻北3-38-16
03-6312-8477 info@mapril.net

A_People 小林晶子 (35 ID91)

各ジャンルで活躍の同窓生を紹介

日本人が1年間に美術館等で美術を鑑賞する割合や、世界の美術展の1日あたり入場者数をみると、日本人は美術展が好きであると言えるそうだ。美術館の学芸員は美術展と作品を背後で支えるイメージを持っていたが、SOMPO美術館の学芸員の小林晶子さんによれば、「学芸員は作品と向き合っているだけではない」そうだ。どういうことなのか。あの「ひまわり」のこととともに話を伺った。

文：新村敏雄（本誌） 写真：SOMPO美術館提供



——今のお仕事にどのようにして就かれたかお聞かせください。

高校の頃から学芸員という仕事の存在は知っていました。また、歴史が好きで考古学をやりたいかったのでICUを受けましたが、当時はまだ学芸員の資格を取れる授業はありませんでした。

フランス文学の授業を取っていたとき、たまたま履修者が4人しかいないうち3人が休んでしまい、先生（児玉クリスティーン教授、当時）とゆっくりお話しすることがありました。学芸員になりたい気持ちを話したら「湯浅記念館の学芸員の方に会ってみれば？」と勧められて原さんという方にお会いしました。

原さんが通信教育で資格を取られたとお聞きしたので、私も立教大の聴講生になって2年在籍し、資格をとりました。ただ、学芸員は院卒が多く、私は日本語で論文を書きたかったため、成城大の院に進みました。ジャンルではフランス近代や欧州の絵画になります。

院で修士を取ったあと、指導教官から「SOMPO美術館で募集がある」と聞いて応募し、無事採用されました。時代はバブルが弾けた後で、美術館のような「箱」はいっぱいできていましたが、採用は狭き門でした。

——学芸員のお仕事についてお聞かせください。展示の企画や所蔵作品の研究をされているというイメージを持っていますが。

私も「作品と向き合っていればいいのかな」と思っていたのですが、そんなことはなくて。作品の所有者、作品輸送や展示施工の業者さん、図録を作成する出版社の方、巡回なら他の美術館の学芸員の方など、内外の多様な関係者の方々とのコミュニケーションが欠かせません。

主要業務としては、展示（教育も含む）、調査、作品の保全になります。展示は作品の劣化につながるので、展示と保全は拮抗しますね。初めての仕事は「奨励事業」といって、館の名前で出す賞の受賞者30～40人の若手の方々による団体展でした。準備に1年ぐらいかかりました。でも大きな展覧会になると5年ぐらいかかります。展覧会にも色々あり、企画会社や新聞社が持ち込むものもあれば、全くのゼロから自分達で始めるものもあります。

私が一から手がけた最初の企画は2003年に開催した「ゴッホと花」展です。会期が約3カ月でしたが、準備に3年以上を費やしました。2000-01年に当館の「ひまわり」をシカゴ美術研究所とオランダのゴッホ美術館に貸し出したのですが、そのバーターとしてシカゴが持っていた「ベルスーズ（子守女）」とゴッホ美術館の「ひまわり」を貸していただけることになり、それがきっかけとなりました。

黄色い「ひまわり」は3点あります。当館にあるのはゴッホがフランスのア

ルルでゴーギャンと共同生活をしていた時に描いたものです。ゴッホ美術館の所蔵品はゴーギャンがゴッホのところから去った後、彼から求められて描いたものです。ゴッホはベルスーズと一緒に「ひまわり」を飾る構想を持っていて、海外から2点を借りられたことでそれを実現できたのです。

ちなみに、海外から作品を借りる際は、その逆もですが、担当の学芸員が作品に付き添って来日し、5日ほど滞在して展示状態をちゃんと確認するのです。

——それにしても、人に見せるものののに、展示は絵にとって良くない、というのはジレンマですね。

最近の化学的調査で19世紀後半の絵画に使われた絵の具の褪色性についてわかったことですが、ゴッホの場合、「ひまわり」に使われている黄色や赤は光に敏感で褪色・変色しやすいです。本来ピンクだった部分は赤が褪色して白に、黄色は茶色に変色するそうです。光も温度も湿度も絵を劣化させる要因なので、「ひまわり」は照度をどんなに高くても120ルクス以下になるようにして、作品は低反射ガラスで密閉しています。2020年に今の建物に作品を移した際、暗めの部屋でも良く見えるには、と試行錯誤した結果、壁紙を薄い紫色にすると見えやすいことがわかりました。それでも絵は劣化していくので、年1回、修復の専門家に「健康診断」をしていただきます。

KOBAYASHI, Shôko

1967年東京都生まれ。人文科学科卒業。立教大学で聴講生として学芸員資格を取得。成城大学大学院文学研究科博士前期課程（美学・美術史専攻）修了。1997年より安田火災東郷青児美術館（現・SOMPO美術館）に学芸員として勤務。



SOMPO美術館3階展示室のゴッホ「ひまわり」

当館の「ひまわり」も、完成は1888年頃ですし、絵の具の褪色性のほかにも、特に絵が描かれているキャンバス地の目が粗いなど、デリケートな部分があって、次の世代にちゃんと受け継いでいくために、状態にはとても気を遣うのです。

——最近の美術館界隈で注目のトピックはありますか？

5年あまりに及んだコロナ禍で、会期を後ろ倒しにせざるを得なくなるなどの影響はありましたが、一方で、海外からも作品を借りられない状況が続いた結果、国内の各館が所蔵している作品を見直す動きが強まったのは、結果的に良いことでした。「印象派の展覧会をするには海外から借りないとできない」といったある種の思い込みがあったのですね。5月末から11月末までポーラ美術館で開かれる「ゴッホ・インパクトー生成する情熱」なども、国内にあるゴッホに関連する作品にきちんと注目した企画です。ちなみに素描や版画なども含めるとゴッホの作品は国内に20から30点ほどあると思います。

——小林さんご自身がお好きな美術館は？

パリ郊外のサンジェルマン・アン・レイにある、古い修道院を改装しているので「プリウレ＝小修道院」とも呼ばれるモーリス・ドニ美術館は好きですね。ドニのほかにもボナールやヴェイヤーलをはじめとするナビ派の作品を多数所蔵しています。学生の頃、事前予約すればライブラリーの資料を閲覧することもでき、訪問した際はあまりに嬉しくて食事を取るのも忘れて資料に没頭していました。国内では鹿児島市立美術館、ひろしま美術館、郡山市立美術館なども好きなどころです。

お邪魔します！ あのメジャー

全31の中から気になるメジャーを紹介

今回ご紹介するメジャーは、政治学です。
選挙や地方自治体の活動をはじめ、私たちの生活と密接に関わる政治。
リベラルアーツとしてICUで政治学を学ぶ意義、そして政治学をどう捉えていくか。
具裕珍先生にお話を伺いました。

文・写真：谷澤 聡（本誌）



政治学はパワーを巡る学問

一言で政治学といっても多様な解釈がありますが、主に「パワー」を巡る学問であると考えています。パワーとは主に力関係や権力、国家権力を指し、目に見えない影響力や支配力のほか、軍事力や経済力といった目に見える形で行使方法が研究されることもあります。パワーの源泉を探求し、その仕組みや思想、歴史、そして行為者（アクター）について考察します。主なアクターとして、国家や政治エリート、官僚や支配層が挙げられますが、近年では市民が自由な意思で参加する市民社会も力を持ちはじめています。近代化とともに政治思想、比較政治、国際政治といった分野に細分化が進んでいますが、根本的にはパワーを巡るアクター間の関係性と、動きや変化を研究する多面的な学問と言えます。

リベラルアーツとしての政治学

ICUには多様なバックグラウンドを持っている先生方が集まっており、日本におけるリベラルアーツの先端ということで様々な試みを進めています。政治学の細分化が進んでいるとお伝えしましたが、政治学は政治学のみならず、社会学や経済学、自然科学とも密

接な関わりがあります。たとえば先日も文学メジャーの先生とのやりとりを行いました。ある作家が描く作品の思想がその時代の政治条件に影響を与えたり、作品にパワーや人間、国家との関係が含まれる場合には文学も政治的となるといった議論をしました。また、環境研究をされる先生とも、環境政策など政治と密接に関わる話や、政治が科学の分野をどのようにサポートするかということをお話ししました。そういう意味でもICUには、政治と関わる多面的な側面を開いた形で学び、考察できる環境が整っています。単に政治思想や比較政治ではなく、政治学を超えた他のメジャーとの結びつき、総合的に考察できる“リベラルアーツとしての政治学”という発想が芽吹いていく良い土壤になっていると思います。

有権者としての政治学入門

担当している政治学の授業の例として、一般教育科目の政治学があります。授業では、民主主義社会における有権者として、政治制度に加えてアクター（行為者）や争点を知ってもらい、一票を投じてもらっています。民主主義というアイデアを世の中で実現する仕組みとして、なぜ選挙が重要なのかを仕組みから説明し、選挙制度によって見え方が変わるということ、一票を投じ

る際に考慮すべきことを扱っています。また、実際の選挙とも並行して、時事問題に焦点を当てたりもしています。ちょうど春学期は、通常国会のサイクルと同じになることもあり、政党や官僚の話を取り扱いました。一般教育科目の授業なので色々な内容を欲張って入れ込みながら、有権者としての考え方について伝えています。

研究テーマとしての保守市民社会

研究テーマとして、市民社会の一部である“保守市民社会”を扱っています。市民社会という概念は民主化運動や社会運動といった形で一般的に使われていましたが、1990年以降に保守的な政治思想、たとえば歴史修正主義や反移民主義といった政治思想のもとに活動するグループが顕著となりました。そういった極右の側面を持つ人々を含め、広い意味で保守的なグループを保守市民社会と呼んでいます。テーマとして、保守市民社会がどのように政治活動に参加し、どのように社会に向け主張を発信するかのメカニズムを研究しています。

従来の市民社会で捉えられるテーマとは違った声を上げる人々をどのように捉えればいいのか。日本社会における保守という意味合いを再考すること、

第30回 政治学 具 裕珍 助教

Yoojin Koo

国際基督教大学 教養学部 政治学・国際関係学デパートメント 助教
東京大学大学院総合文化研究科 博士（学術）。専門：政治学。主要テーマ：現代日本政治、市民社会論、社会運動論、国家・社会関係など。東京大学東アジア藝文書院特任講師を経て、2024年よりICUに着任。近著に『保守市民社会と日本政治——日本会議の動員とアドボカシー：1990-2012』などがある。

既成保守政党と社会の保守・右派勢力がどのように繋がっているかを問い直すという観点から、保守市民社会という言葉を独自に使っています。問題の解決には、こうした作業を通して相手を理解する必要があるのではないかと考えています。

社会を見るツールとしての政治学

政治学は、誰でも最初から関心があるというより、まず社会問題に関心を持ち、その問題の根本を探る中で触れる学問であると思っています。社会学などの他の学問も、他者の合理性を理解しようという目的がありますが、政治学は更に一歩踏み込んで、仕組みや、そこで行動を起こす存在など、責任の所在を明らかにすること。その上で、課題を解決していくものだと考えています。特に今は世の中が目まぐるしく変わっていて、ある意味でクリティカルな時代だと言えます。政治学というツールを、リベラルアーツとしての政治学を通じて、複雑な問題を紐解くことに役立てられれば、きっと、人や社会、国、世界の見え方が違ってくるはずです。

政治学のデータ

● 開講されている主な授業科目
(2025年度現在)

【一般教育科目】

国際関係の課題

宗教と国際政治

国際関係ディベート

政治学A、B、C

【政治学メジャー】

政治学方法論入門

国際政治学

政治学概論

西欧政治思想史 I、II、III

政治文化論

政治理論

比較政治学

日本の政治

世論研究

グローバル社会正義論

政治学特別研究 I、II

日本政治思想史

アメリカ民主主義の国際比較

政治学・国際関係学における世論

調査特別研究

未来予想ZOO

～ICU卒業生ならではのさまざまな生き方から学ぶ～

文：神田真司 (49 ID05、学生部)

2025年5月17日(土)、ICUキャンパス内の楓寮・縦寮1階ウイステリア・ホールにて、同窓会学生部主催・大学協賛によるイベント「未来予想ZOO」が開催されました。

「未来予想ZOO」は、在學生を対象としたイベントで、卒業生ゲストとのセッションを通じて、就職活動とは異なる切り口から、卒業生の生き方・考え方の多様性を知ってもらい、大学での過ごし方や卒業後の“生き方”について考えるヒントを得てもらうことを目的にしています。

今回は、新入生イベントでの案内があったためか、事前申し込みはほぼ1年生で90人を超す大盛況となりました。ところが、当日ジメジメとした雨だったせいか、風邪が流行ったせいか、過去最高のキャンセル率をマークし、当日はなんと1年生のみ18人の参加となりました。同窓生は、同窓会学生部のメンバーを含め22人にご参加いただきました。結果的に、1：1くらい

の比率になって、時間たっぷりざくばらんに話せて良かったのかもしれませんが(たくさんの在學生を迎えるおつもりだった同窓生の方々、重ね重ねお詫び申し上げます)。

この会は、「ZOO＝動物園」という名前の通り、ユニークな生き方をされている同窓生をゲストとしてお迎えしております。若い頃によく考えることは大事なのですが、ネガティブに悩んでもしかたがありません。バブル期や氷河期を生き抜いた様々な「動物たち」の、今だから笑って話せるようなエピソードを聞き、自分も大丈夫かな、と少しでも思ってくれたら、という思いで開催しました。

卒業生には、事前に「学生時代に力を入れたこと」「卒業後のキャリア」「学生時代、悔いが残ること／うまくいかなかったと思うこと／今の自分ならどうする?」「学生時代、やっておくとうまいこと・良かったこと・現役の在學生に伝えたいメッセージ」とい

ったアンケートに答えて頂きました。ICUという同じ場で学んだ者同士でなければできない交流の場となったのではないかと思います。これから過ごしていく貴重な大学での生活を、将来のおぼろげなビジョンを垣間見ながら過ごしていく材料にしていってくれたら、ご参加頂いた同窓生のみなさまも喜んでくれると思います。

イベント中は各テーブル在學生2人、同窓生2人がベースの構成で、フリートークで進められ、同窓生の転職の回数にビックリしたり、在学中のGPAのあまりもの悪さに在學生が絶句するという微笑ましい場面なども見られました。在學生からは、「卒業生もまだ自分探し中だという言葉に勇気をもらった」、「これから何をしていこうか考えを膨らます機会になった」、などの声を聞くことができました。

また、同窓生も、在學生に対して、優しくリラックスできるムードを常に作りながら、「やってよかった」「あれ

もやっとけばよかった」というエピソードを話してくれていました。不思議と「やらなきゃよかった」、というお声は聞かなかったのが、人間良い思い出ばかり覚えているというのは本当だと、私自身も興味深く聞き入っていました。在學生も、振り返ればきっと楽しい思い出しか残らないので、今を楽しく過ごしてもらえたら、と思います。

今回の「未来予想ZOO」が、在學生にとって、大学時代の過ごし方やその後の「生き方」のヒントを得られる場になっていると嬉しいです。

次回「未来予想ZOO」は、人が集まるようなお天気の日になるように祈っています。

今後も、同窓会学生部では、在學生のニーズを聴き取り、同じICUで過ごした卒業生ならではの在學生へのサポートを提供していきたいと考えています。

私たちは、「はたらくをよくなる[®]」会社です。



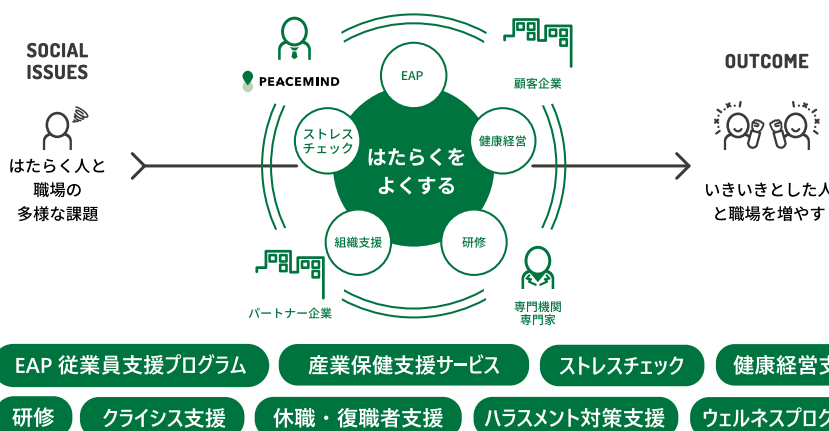
ピースマインド株式会社
代表取締役社長・
共同創業者
荻原 英人 (ID00)

ピースマインドは「はたらく人が抱える『不』を解決し、心豊かな未来を創る」をミッションに「はたらくをよくなる」ソリューションを提供している企業です。

職場のメンタルヘルス・健康経営の推進、ハラスメント対策等の人と組織に関する課題をお持ちの経営者、人事の皆様からのご相談をお受けしています。

国内外のグローバル企業の成長支援と一緒にチャレンジしてくれる仲間も募集しています。

Working Better Together[®]



ピースマインド社内の「はたらくをよくなる」取り組みを紹介しています。ぜひご覧ください。
エンプロイヤーサクセス部
人事総務グループ長
小島 真理 (ID87)



WHY
PEACEMIND

サービス開始から
26年

お取引企業
1400社/年

外資系顧客構成比
35%



03-3541-8660

ピースマインド株式会社

ホームページ



あなたのご意思の実現に向けて、サポートいたします。

三井住友信託銀行の遺言信託

皆さまの財産に関するご意思を反映する遺言書作成のご相談や、遺言書の保管※・遺言の執行などを一貫してお引き受けいたします。まずは財務コンサルタント・トラストコンサルタントまでご相談ください。

※自筆証書遺言を作成する場合、自筆証書遺言書保管制度を利用し、遺言書は法務局にて保管します。

【遺言信託(執行コース)手数料等について(消費税等込み)】(2025年6月1日現在)

〈お申込時〉基本手数料:330,000円 別途、公正証書作成費用、戸籍謄本などの取り寄せに関する費用等が必要になります。

〈遺言書保管中〉遺言書保管料:毎年6,600円 〈遺言執行時〉遺言執行報酬:当社所定の報酬を申し受けます(最低報酬額:1,100,000円)。上記はお支払プランの一例です。他のお支払プランもあります。詳しくは、窓口までお問い合わせください。※契約締結後に、解約、遺言書正本の保管辞退、遺言執行者への就任の辞退、遺言執行者の辞任等が生じた場合であっても、基本手数料はご返金いたしません。

◎国際基督教大学と当社は「遺贈による寄付制度」の提携をしています。この制度により遺贈をされる場合は、遺言信託(執行コース)の基本手数料が5万円割引(税抜き)となります。ご相談の際にお申し出ください。

資料のご請求は以下までお問い合わせください。 ※資料請求以外の内容については、店舗や専門部署へお取次いたします。

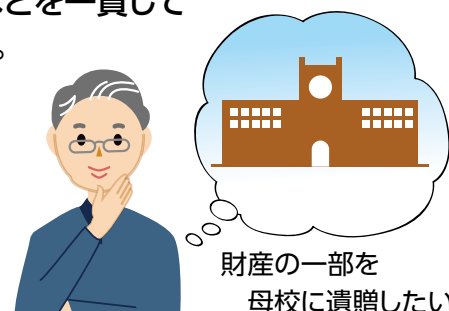
0120-977-641

受付時間

平日9:00～17:00(土・日・祝日および12/31～1/3はご利用いただけません)

三井住友信託 遺言信託

検索



三井住友信託銀行



左から／【硬式庭球部】2024 年度関東大学テニスリーグ決勝トーナメント一戦目／同、終了後／2024 年度関東大学テニスリーグ予選、決勝トーナメント進出確定／2024 年春のキダー杯

From the University

大学のページ

献学時、または皆さまが在学されていた当時から続く学生団体が、今も多数活動しています。
学業だけにとどまらないICUのもう一つの魅力、課外活動における学生の活躍をご覧ください。

文・写真：各団体より提供

硬式庭球部

国際基督教大学硬式庭球部は1953年に設立され、今年で72目を迎えます。現在は男女合わせて13人の部員が所属しており、夏に行われる関東大学テニスリーグでの昇格を目標に、少人数ながら日々練習に励んでいます。

現在、男子部は7部、女子部は5部に所属し、男子部は昨年度(2024年度)の関東大学テニスリーグにおいて、8年ぶりに6部昇格をかけた決勝トーナメントに進出することができました。現役男子部員にとって初の決勝進出となり、日頃の努力が実を結んだ忘れがたい瞬間となりました。女子部はインターハイ出場経験のある1年生が加わり、高校時代に全日本選手権出場経験のある主将を中心に、強いチームを作り上げ、今年のリーグ戦での活躍が大いに期待されています。男女部ともに、昨年度以上の成績を収めるべく、チームの結束力および各自の技術向上を目指して、日々精進しています。

また、OB・OGの皆様には、日頃より多大なるご支援を賜り、心より感謝申し上げます。活動に欠かせない新球のご支援、主な活動場所であるクレーコートでの維持のためのご寄付、さらにはキダー杯やOB戦を通じた技術面での指導など、いずれも現役部員にとって大変心強く、大きな励みとなっています。

今後の活動としては、夏のリーグ戦終了をもちまして、最高学年であるID26代が引退いたします。それに伴い、現役部員は男子部6人、女子部2人の計8人となります。26年度の春には、クレーコートの掘り起こし作業を実施するとともに、OB・OGの皆様により再びICUへお集まりいただき、リユニオンを開催し、現役部員から詳細な近況報告を行う予定です。

リユニオンなどのイベントに関しましては、Facebookやその他SNSを通じて随時情報を発信いたしますので、ぜひご参加いただけますと幸いです。また、現在2025年度の関東大学テニスリーグが開催中ですので、各試合の結果についても随時Facebookにて共有いたします。良いご報告ができるよう、全試合全力で臨んでまいります。

部の運営や資金面につきましては、部員数の減少に伴い、今後、厳しい状況が予想されますが、私たち現役部員一同、関東大学テニスリーグでの昇格という目標に向かって一心不乱に努力してまいります。今後とも変わらぬご支援、ご声援を賜りますようお願い申し上げます。

【設立年】1953年(継続 72年)

【現在の在籍人数】13人

【活動日】

平日週2回、土曜日 隔週日曜

【活動場所】

クレーコート、オムニコート

【直近のイベントや試合等】

関東大学テニスリーグ

【Instagram】

女子：@icuwomenstennis

男子：@icutennisteammens

硬式庭球部女子
ICU Tennis Team
Womens



硬式庭球部男子
ICU Tennis Team
Mens



長唄研究会

ICU長唄研究会(別名：三味線くらぶ)は歌舞伎の伴奏音楽である「長唄」を演奏するサークルです。三味

線を演奏する三味線方、唄を歌う唄方とに分かれて演奏します。創立は1974年で、昨年度50周年を迎えました。部員は稀音家六綾(きねや・ろくあや)先生から三味線を、稀音家六知種(きねや・ろくちぐさ)先生から唄を学んでいます。26年前に創立された東大長唄研究会とは姉妹サークルで、普段のお稽古や定期演奏会を合同で行っています。主な活動としては、月に2～3回ある三味線や唄のお稽古や、ICU祭での演奏、毎年12月の定期演奏会があります。新入生向けの「さくら」「末広がり」といった曲から「勸進帳」「船弁慶」などの大曲まで、初心者でも触れることができる貴重なサークルです。

長唄研究会の魅力はアットホームな環境で個性豊かなメンバーが集まっているところです。このサークルの好きなどを部員に聞くと、みんな口を揃えて「人」と答えています。多種多様な趣味や興味を持つ人が集まっている、お互いにそれを受け入れる雰囲気、居心地の良さに繋がっていると感じています。そして、先生方は無償でお稽古をしてくださるほか、毎回お昼を振舞ってくださるなど、とてもありがたい環境で学ばせていただいています。一人暮らしをしている学生や留学生にとっても第二の実家のような温かさがあります。また、海外で求められる自国文化の知識を長唄を通して学べることは、海外志向の強いICUの学生にとってはとても魅力的で貴重な場だと考えています。

コロナ禍には全面的に活動が中止されていましたが、2021年頃から徐々にお稽古が再開し、定期演奏会やICU祭での演奏など、発表できる場が増えています。

創立時は部室も三味線もなく、三味線の代わりに長い木の棒で練習を行っ

ていたと聞いています。OB・OGの方々の努力により三味線が集まり、現在は多くの三味線を使って練習ができています。長唄研究会のOB・OGの方々とは交流が多くあり、毎年定期演奏会で一緒に演奏をしています。また、1泊2日の合宿を行う際には演奏の指導をしてくださったり、新歓やイベントの際にもかけつけてくださったりして、日々支えられています。昨年度には創立50周年を記念して、現役、OB・OG、各界の支援者、総勢約100人で記念パーティーを開催しました。現役生が先輩方の繋いできた想いや歴史を学ぶ貴重な交流の場となりました。これからもこの歴史を繋いでいけるよう、努力をして行きたいと思っておりますので、何卒応援のほどよろしくお願いいたします。

【創立年】1974年、継続51年

【現在の在籍人数】13人

【活動日】週末に月2～3回のお稽古、平日は部室で自主練

【活動場所】自由が丘・武蔵小金井の先生のご自宅、ディッフェンドルファー記念館西棟472号室

【直近のイベントや試合等】2024年12月に創立50周年記念定期演奏会を開催しました。

【Instagram】@icu_nagaken

長唄研究会
The Shamisen Club
(Nagauta)



*このページは、各学生団体からの寄稿で構成しており、内容の事実関係の確認は当該団体において行われております。

*寄稿終了のご案内：本号をもちまして、大学のニュースは一区切りとなります。長らくのご愛読、誠にありがとうございました。



左から／【長唄研究会】部室／集中稽古での様子／先生のご自宅の猫／国立劇場にて希扇会

From the University

Many of the student groups, established when ICU first opened its doors to students and also while you were students at the university, still continue to be active today. Not just limited to academic studies, ICU's appeal also extends to its extracurricular activities. Please take a look at the active participation of students in their extracurricular activities.

Text provided by each group and club

ICU Tennis Team

The ICU Tennis Team was founded in 1953 and is celebrating its 72nd anniversary this year. The team currently has 13 players—a mix of men and women—and although we are a small team, we train daily with a shared goal: to earn promotion this summer in the Kanto Inter-Collegiate Tennis League.

Currently, the men's team plays in the 7th league, and the women's team belongs to the 5th league. Last season (the 2024 academic year), the men's team made it to the league finals for the first time in eight years, competing for promotion to the 6th league. It was the first finals appearance for our current men's team—a memorable milestone and a testament to our daily hard work and dedication. This year, the women's team welcomed a freshman who competed at the Inter High School Athletic Meeting. With a captain who played in the All Japan Tennis Championships during high school, we have assembled a strong, promising team; we cannot wait to see how we perform in this season's league. Both the men's and women's teams train hard every day—building team spirit and honing skills—to outdo last year's results.

We are truly grateful to all our alumni for your tremendous support—whether by providing the new balls we cannot do without; donating to help maintain our clay courts, the main locations of our activity; or even offering coaching through matches at the Kidder Cup and alumni games. Every bit of your help lifts our team's morale and confidence. Thank you for standing by us.

Looking ahead, once the summer league concludes, our senior ID 26 members will retire, leaving eight active players—six men and two women. In the spring of AY2026, we will turn up the clay court soil, then welcome our alumni back to ICU for a re-

union. It will be a great chance for the current team to fill the alumni in on all the latest.

Please stay tuned on Facebook and our other social media platforms for the reunion and other events. We hope you can join us! The 2025 Kanto Inter-Collegiate Tennis League is now in full swing. We will post each match result on Facebook, and we are giving our all in every match so we can bring you good news.

With our team's membership declining, we foresee management and financial challenges ahead. Even so, all of us on the team are fully focused on one thing: earning promotion in the Kanto Inter-Collegiate Tennis League. We deeply appreciate your steady support and encouragement as we push forward.

Founded: 1953 (now in our 72nd year)
Current members: 13
Schedule: Twice weekly on weekdays; Saturdays; every other Sunday
Locations: Clay courts and indoor Omnicourts
Recent events: Kanto Inter-Collegiate Tennis League

硬式庭球部女子
ICU Tennis Team
Womens



硬式庭球部男子
ICU Tennis Team
Mens



The Shamisen Club (Nagauta)

The Shamisen Club (Nagauta) brings students together to perform *nagauta*, the lyrical musical accompaniment of kabuki plays. In our performances, members take on one of two roles: shamisen players (*shamisen-kata*) and singers (*uta-kata*). Founded in 1974,

the club celebrated its 50th anniversary last year. Our instructors are two masters of the art: Kineya Rokuaya for the *shamisen* and Kineya Rokuchigusa for singing. We are a sister club of the University of Tokyo Shamisen Club, established 26 years ago. Together, we hold regular practice sessions and annual concerts. The club meets two to three times a month for *shamisen* and singing practice, performs at the ICU Festival, and holds its annual concert every December as our main activities. Our repertoire is broad and inclusive—beginners in their freshman year can start with accessible pieces like *Sakura* ("Cherry Blossoms") and *Suehirogari* ("Folding Fan"), and then progress to major works such as *Kanjincho* ("The Subscription List") and *Funa Benkei* ("Benkei on the Boat"). Our club offers a rare opportunity for students of all levels to explore and participate in this rich musical tradition.

The Shamisen Club thrives on its warm, welcoming atmosphere and the unique people who join. Ask any member what they love most about this club, and they will likely point to one thing—the people. With so many different hobbies and interests under one roof, members genuinely embrace each other's passions, fostering a natural sense of belonging. Our teachers generously volunteer their time and expertise, and even prepare lunch for us at every practice—an environment we greatly appreciate. For many students, the club feels like a second home, especially for those living alone or coming from abroad. Beyond musical practice, learning traditional Japanese music also provides valuable cultural insight, making it a highly rewarding and enriching experience for ICU students aspiring to international careers. Activities were fully suspended during the COVID-19 pandemic, but practice sessions gradually resumed in 2021. Today, we have more performance opportunities than ever, from

our annual concert to the ICU Festival.

In the early days of the club, we did not even have a dedicated room or a *shamisen*, so members instead practiced with long wooden sticks. Over time, thanks to the dedication of our alumni, enough shamisens have been donated that we can now rehearse with a full complement of instruments. We stay closely connected with Shamisen Club alumni—every year, we share the stage with them at our annual concert. During our one-night, two-day training camp, those alumni teach us performance techniques and join us for new member orientation and other events, always ready to help. Last year, we celebrated a major milestone—our 50th anniversary—and approximately 100 people, including current students, alumni, and supporters from various fields, came together for a celebratory party. It was a fantastic opportunity for everyone to learn about the traditions and vision passed down by our predecessors. We remain committed to carrying that legacy forward. We hope you will continue to cheer us on!

Founded: 1974 (now in our 51st year)
Current members: 13
Practice schedule: Two to three weekend practice sessions per month; self-guided weekday practice in the club room
Locations: Instructors' homes in Jiyugaoka and Musashi-Koganei; Diefendorfer Memorial Hall, West Wing, Room 472
Recent update: In December 2024, we held our annual concert, celebrating our 50th anniversary

長唄研究会
The Shamisen Club
(Nagauta)





From the Alumni House

アラムナイハウスから

とちぎ支部同窓会

文：前田年秋 (16 ID72、前支部長)、砂川正子 (19 ID75、前事務局)

新型コロナウイルスの感染拡大を避け、4年間同窓会を開かずにいましたが、久しぶりに2024年12月7日にとちぎ支部同窓会を開催しました。JR宇都宮駅からLRT (宇都宮ライトレール) に乗り、鬼怒川を越えた清原地区市民センターに10人+富岡徹郎ICU常務理事 (26 ID82) が集いました。

まずは自己紹介から。ICU卒業生ということだけが共通で、年齢は20代～70代、仕事や興味は様々です。その後、栃木県危機管理課職員による「災害から命・財産・我が家・我がまちを守るには」と題する最近の災害状況、県の対策などの出前講座を聞きました。栃木県は「災害の少ない県」と思われてきましたが、これからは備えが必要です。県職員さんは、能登半島地震の被災地の支援に3ヵ月入られたそうで、「あたりまえの日常の有難さに気づいた」そうです。

終了後、JR宇都宮駅前の餃子店と宇都宮市清原地区のカフェに分かれ昼食をとりながら大いに語りました。異なる背景の人との会話から新たな刺激を受け、また発見がありました。今後の活動の糧とすることを思い、再会を楽しみに散会しました。

未だとちぎ支部同窓会に参加したことがない栃木県ゆかりの卒業生は、一度とちぎ支部同窓会に参加してみませんか。同窓生という仲間の集う交流会で何か得るものがあると思います。

最後に、これまで8年間、前田 (16 ID72) と砂川 (19 ID75) がとちぎ支部の役員でしたが、荒川さん

(33 ID89、アジア学院校長) と井澤さん (47 ID03、アジア学院広報) に交代したことを報告します。支部会参加者の方々のこれまでのご支援に感謝いたします。



ワシントンDC支部

文：清水素子 (32 ID 88、支部代表)

2024年12月15日に、ICU同窓会ワシントンDC支部と上智大学同窓会ワシントンDC支部との3回目の合同同窓会を盛会にて開催することができました。ICU同窓会からは、The Asia GroupのManaging PartnerであるKurt Tong大使を、上智大学同窓会からは、TBSワシントン支局長である櫻元照幸様を登壇者に迎え、大統領選とこれからの国際関係、という大変貴重なお話を伺うことができました。全37人の参加者があり、ICUからは、21人の同窓生にご参加いただきました。

On December 15th, 2024, we had the pleasure of holding a successful joint alumni reunion with Sophia University. This is the 3rd time we had the joint reunion with Sophia-kai. We were honored to welcome Ambassador Kurt Tong, Managing Partner of The Asia Group and an ICU alumnus, as well as Mr. Teruyuki Kashimoto, a Sophia University alumnus and TBS Washington Bureau Chief, as our speakers. Their insightful discussion

on the US presidential election and post-election international relations was truly invaluable. We had 37 participants in total, 21 of whom were from ICU. (Motoko Shimizu, (32 ID88) ICU Alumni, DC Chapter)



第18回グループICU展

文：尾崎洋平 (58 ID14)

ICUのOBGが集い各々の様々なArt作品を展示する「第18回グループICU展」は、2025年2月2日から2月8日まで有楽町の東京交通会館で開催し、7日間で来場者300人と、盛況のうちに無事終えることが出来ました。

出展者は20人、作品は絵画・書・写真・陶芸・能面・生け花・キルト・染織と多岐に渡り、それ故お客様にも様々なArtに触れられたと好評でした。

出展者は、6期生から、ID14 (58期) と幅広く、出展者同士の会話もICUの思い出や“最近”のICUにと花咲き、実際にアットホームなギャラリー会場となりました。

会場風景、作品の一部を以下に写真でご紹介させていただいておりますが、この度「グループICU展」専用のインスタグラムアカウントを作成いたしましたので、作品の詳細は、ぜひこちらからご覧ください。(アカウント：@group_icu_exhibition) 下記のQRコードからでもご覧

いただけます。

来年の開催時期・場所につきましては、決まり次第またアラムナイニュースなどでお知らせいたします。

私たちと一緒に作品展示をされたい方を募集しております。ご興味のある方はぜひ下記までご連絡ください。お待ちしております。

連絡先：group.icu.exhibition@gmail.com



ICU 1期、2期生の会

文：金澤正剛 (1)

2025年4月4日 (金) に初めての「ICU 1期、2期生の会」がアラムナイハウスで開催されました。当日は晴天、桜も丁度満開という素晴らしい日に恵まれました。今回2期生に関しては入学70年、全員卒寿 (満90歳) という節目の年に相当し、参集するのも十年ぶり。出席者は1期生が15人に家族5人、2期生が14人に家族



4人。かつて在校生がこの2学年だけという時代もあったわけで、終始和気あいあい、素晴らしい会合となりました。初めに岩切正一郎学長の挨拶、同窓会側から大学理事の富岡徹郎さん(26 ID82)の挨拶があり、1期生桑ヶ谷森男君の音頭で乾杯。また懇談の途中で、出席同窓生全員から一言ずつ話していただきました。その他、今年ピースベル奨学金を得て入学した学生7人の代表者からお礼と抱負の言葉も。12時半からの会合は大変楽しく、時間の経つのをすっかり忘れるほどでした。なお来年2026年には「第1期生有志の会」を、4月9日(木)に開催する予定です。



ID84・85 +α バレーボール部リユニオン

文：張田真美(29 ID85)

2025年5月17日、神楽坂のフレンチレストランにID82～88の30人(中には大阪や名古屋からの参加者も)が集まり笑い声が絶えない4時間を過ごしました。事前にLINEグループにアルバムを作り学生時代の懐かしい写真を募集し、当日は集まった150枚をスライドショーにて鑑賞しました。試合や合宿の写真(女子は今懐かしいブルマー姿)だけでなく、飲み会、温泉旅行、スキー旅行などの写真も多く、あの楽しかった青春時代がよみがえり、会場は大いに沸きました。

懐かしい曲のイントロ当てクイズでは、カツラをかぶって変装した最年長者が突然現れて踊ったり、やはり変装した幹事の一人が歌い出したり、キレの良いダンスを披露する有志がいたりして、昔のノリで盛り上がりました。

仕事でますます責任ある立場で活躍する人もいれば、子育てや仕事がひと段落し、フリーランスとして新たなステージでの仕事にチャレンジしたり、第二の人生において学びなおし資格を取得したり、また趣味の世界を広げたりと、近況報告からは大きな刺激を受けることができました。今回の集まりを機に、遠くない将来また会うことを約束してお開きとなりました。

この場を借りて、準備をしてくれた幹事の皆さんにあらためてお礼を申し上げます。



北陸支部会

文：田井陽子(39 ID95)

2025年5月31日(土) 14時半より2時間以上にわたり、松島保真ICU同窓会北陸支部長(40 ID96)が牧師を務める小松教会で北陸支部会が開かれた。ICU同窓生13人と小学生2人、zoom参加者6人が関東、関西、岐阜、北陸から集った。昨年2度も激甚災害に指定された能登半島だが、支部会では中谷智一前支部長(23 ID79)と裕子さん(25 ID81)夫妻



への記念品、展示品、同窓生による被災地支援品の茶菓子が用意され、味も大好評、物販売上高も予想を上回った。

中谷前支部長からは心の専門家として被災地で感じた「能登の子どもたちの強さ」のお話、輪島からzoom参加した日本料理店「杣径」の北崎裕シェフ(40 ID96、本号とvol.141掲載)のお話、富岡徹郎ICU常務理事(26 ID82)による「ICU過去、現在、未来」のお話も復興への機運につながり、「杣径」へは支部会後も同窓生が3人以上食事に訪れている。また、ICU1年生(前回支部会参加者)の経験を基に英語教育の情報交換も支部会内で続いている。

ICU同窓生の奥能登視察やボランティアを快くサポートしてくれた被災者の方の復興への熱い思い、優しさと強さにふれ、支援活動が続ける必要性を再認識した。

昨年から協力いただいたICU同窓会事務局、ALUMNI NEWS、北陸支部関係者、国内外の同窓生から能登への温かい支援に対し、支部会出席者や被災地から感謝の声が多く聞かれる。メディアで紹介された炊出しチーム(17,000食)の北崎シェフや、川本七穂子さん(42 ID98)が広報を務める(株)金沢大地の能登農業復興プロジェクト、支部会での物販、奥能登の農場を手伝った新村敏雄さん(27 ID83)の活動など、ICUや被災地の未来のための活動を今後も同窓会WEB北陸支部のページで発信し続けていきたい。



寄付者御芳名 Donors

齋藤顯一(17)
堀元子(18 ID74)
川西庸介(26 ID82)
貴重なご寄付を賜り、誠にありがとうございます。

たずね人 Missing

池田英人(35 ID91)
深見淳(43 ID99)
田中智己(49 ID05)
金ボラム(55 ID11)
市村脩一郎(57 ID13)
野邊大樹(61 ID17)
鳴島歳紀(63 ID19)
動静をご存知の方は事務局までご一報ください。

訃報 Obituary

神長百合子(10)
神長勲(10)
河合美子(27 ID83)
Liu Yuen Kai(11)
笈川一弥(3)
石原(旧姓：松崎)裕子(4)
高瀬千賀子(25 ID81)
心よりお悔やみ申し上げます。



icualumni.com/to_alumni/alumnihouse/gallery 11 月後半には紅葉の中

事務局からのお知らせ

★ 広告募集！

本誌では広告を募集しています。フルサイズ6万円、ハーフサイズ3万円で承っております。ご興味のある方は、詳細を事務局までお問合せください

★ 原稿をお寄せください！

期会、リユニオンなどの案内・報告をお寄せください。本誌およびWeb サイトに掲載いたします。

★住所変更について

住所・勤務先・氏名の変更の際はメールまたは同窓会のWebサイトの住所変更から、ご一報ください。
icualumni.office@icu.ac.jp



地方・海外にご転勤の際には支部をご紹介します。同窓会事務局までお問合せください。

★ ご協力をお願いします

大学の宣伝＝大学への支援という考え方から、同窓生の著作、雑誌インタビューなどには、略歴欄に「国際基督教大学卒業」とお入れいただけますよう、お願い申し上げます。

★同期会やリユニオンのご相談は...

同期への連絡、学内の施設予約、ケータリング関連の情報提供など、同窓会事務局がサポートします（一部有料）。久しぶりにキャンパスで集いたいという気持ちが芽生えたら、お気軽にメールでご連絡ください。

icualumni.office@icu.ac.jp

アラムナイニュース電子版のお申込み
同窓会メールマガジン配信先のご登録

- 1) アラムナイニュースの電子版配信をご希望の方は、下記フォームからご登録をお願いいたします。ご登録いただきますと、郵送でのお届けは行わずにメールで電子版をご案内いたします。
 - 2) 2023年1月から、ICU同窓会員向けにメールマガジンによる情報発信を始めました。メールマガジンが届いていない方は、メールアドレスのご登録がないか、古いアドレスが登録されている可能性があります。ぜひこの機会に、下記フォームから最新のメールアドレスのご登録をお願いいたします。
- ご登録は、こちらのフォームからお願いいたします。（住所変更と共通のフォームです）
https://www.icualumni.com/to_alumni/register/



—— DAY賞候補者をご推薦ください ——

Distinguished Alumni of the Year (DAY) 賞は、国際基督教大学に在籍したことのある方（卒業生・留学生・教職員。ただし故人は対象外）の中から、大学および同窓会の知名度・魅力度を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるために贈呈されます。皆様からのご推薦をお待ち申し上げております。

- ※ 自薦・他薦を問いません。
- ※ 推薦は年間を通して受け付け、毎年10月15日受け付け分までを選考対象として翌3月の桜祭りで受賞者を表彰します。
- ※ 受賞者は同窓会ウェブサイトおよびアラムナイニュースで発表されます。
- ※ 推薦および選考の過程については公開されません。
- ※ 歴代の受賞者は、ウェブサイトをご覧ください。

推薦方法 いずれかの方法でご推薦ください

- 1) 同窓会ウェブサイト「DAY賞」のページ[推薦フォーム]をご利用ください。
<https://www.icualumni.com/activities/day/>
- 2) 同ページより[推薦用紙PDF]をダウンロードし、必要事項をご記入の上ICU同窓会事務局あてに郵送でお送りください。
- 3) メールに以下の必要事項を記載してICU同窓会事務局宛にお送りください。
 - ①推薦したい方の氏名
 - ②推薦したい方の卒業年あるいは在籍年（分かる範囲で）
 - ③推薦理由：新聞記事などの客観的資料があればあわせてお送りください。
 - ④あなた（推薦者）の氏名、卒業年または学生ID、住所、電話番号、メールアドレス

ICU同窓会事務局 〒181-8585東京都三鷹市大沢3-10-2
TEL&FAX：0422-33-3320 E-mail：icualumni.office@icu.ac.jp



ICU祭で「アラムナイ・カフェ」
～ Visit Alumni Café at ICU Festival ～

ICU祭の季節がやって参りました。
今年は10月12日（日）と13日（月・祝）に開催されます。
同窓会ではアラムナイ・カフェを開きます。懐かしいICUの緑を眺めながら、ラウンジにて寛ぎのひとときをお過ごしください。また、ICU祭実行委員会のテントでは、在学生により同窓会グッズが販売されます。こちらもどうぞご利用ください。
「アラムナイ・カフェ」 アラムナイハウス2階ラウンジにて
10月12日（日）、13日（月・祝）両日とも11:00～16:00（予定）
最新情報は右のQRコードより同窓会ウェブサイトでご覧いただけます。



STAFF

EDITOR IN CHIEF
長谷川由紀 HASEGAWA, Yuki (32 ID88)

MANAGING EDITOR
松田真理子 MATSUDA, Mariko (38 ID94)

EDITORS
新村敏雄 SHINMURA, Toshio (27 ID83)
福本高宏 FUKUMOTO, Takahiro (32 ID88)
今井 順 IMAI, Jun (34 ID90)
太田順子 OOTA, Junko (35 ID91)
谷澤 聡 TANIZAWA, Satoshi (54 ID10)
Benjamin Delfs (ID15)
滝沢貴大 TAKIZAWA, Takahiro (62 ID18)

PHOTOGRAPHER
松島真理 MATSUSHIMA, Mari (36 ID92)

ART DIRECTOR
佐野久美子 SANO, Kumiko (44 ID00)

PRINTING DIRECTOR
坂井 健 SAKAI, Takeshi (小宮山印刷)

SECRETARY GENERAL
岸本 誠 KISHIMOTO, Makoto

PUBLISHER
廣岡敏行 HIROOKA, Toshiyuki (31 ID87)

cover&backcover photo:
吉富祐一 (写真)
国際基督教大学広報・社会連携部 (提供)

ご意見・ご感想をお気軽に

アラムナイニュースは、同窓生のみ
なさまのために制作しているものです。
今後の制作の参考にしますので、ご意
見・ご感想、企画や人物の紹介等有
る方は、メールにてお気軽に事務局ま
でお知らせください。

アラムナイニュース編集部員募集

あなたの経験をANに生かしてみま
せんか？企画、取材、執筆、撮影、編
集進行等を一緒にやって頂ける方を大
募集中です。もちろん未経験でも可。
最初は一緒に取材などを行いながら編
集のプロから直接技術を学べますし、
3年ぐらいやれば、一通り編集の基本
が身に付きます。もちろん、現役の学
生さんも大歓迎です。興味のある方は、
同窓会事務局へメールでご連絡くださ
い。

icualumni.office@icu.ac.jp

■大学・同窓会に関する情報が満載です。
ぜひ一度ご覧ください。
同窓会Webサイト
https://www.icualumni.com/
同窓会 Facebook
https://www.facebook.com/icualumniassociation
同窓会 Instagram
https://www.instagram.com/icualumniassociation/
大学 Web サイト https://www.icu.ac.jp/
JICUFWeb サイト https://www.jicuf.org/
■ICU 同窓会事務局
〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2
TEL&FAX：0422-33-3320
Email：icualumni.office@icu.ac.jp

